
断片の使徒 -2-

草野 瀬津璃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

断片の使徒 — 2 —

【Nコード】

N1032Y

【作者名】

草野 瀬津璃

【あらすじ】

きっかけは、肝試しだった。ささいな偶然から異世界エレイスガイアに飛んでしまった塚原修太と幼馴染の春宮啓介は、創造主オルファールを助ける為に神の断片を集めることになる。無愛想な主人公修太と、完璧人間だが不思議現象大好きな啓介の異世界オカルトツアー。お次は、迷宮都市ビルクモールに眠る断片を探しに、セーレティー精霊国へ。仲間も増えて、いっそう騒がしくも旅は続く。（※ときどき気まぐれに亀更新でいくつもりですし、遊び心八割でノリで進行予定です。あまり期待しないで下さい。残酷描写

が多いので、念の為、R15に設定させて頂いております)

登場人物紹介

Ⅱ 主人公とその近辺を簡単にⅡ

・塚原修太（17）

短い黒髪と黒目をした、硬派な印象の少年。

高校一年で両親を亡くし、一人暮らしをしている。啓介とは幼稚園からの幼馴染にして親友。

無愛想で、基本的に無表情だが、啓介や春宮家の人間という時は自然と笑っていることもある。主に突っ込み役。大食いで、食い意地を張っている。グルメな分、料理の腕もそこそこだが、基本、食べる専門。

＜＜ エレイスガイア ver

黒髪黒目の十二歳くらいの少年。

〈黒〉。体調を崩しやすい体質になった。

初期所持品…旅人の指輪、黒いポンチョなどの民族衣装

・春宮啓介（17）

地毛であるが、茶色い髪と目をしている、格好良いというより綺麗な少年。

修太とは幼稚園からの幼馴染。明るく社交的で、クラスのムードメーカー。男女ともに人気がある。剣道道場に小さい頃から通っていて、県大会常連レベルの強さ。

不思議好きなオカルトマニアで、何かあるとすぐに出かけていく。その割に部屋は普通。ネーミングセンスが壊滅的。

〱〱 エレイスガイア ver

ホワイトグレーの髪と銀目の、十五歳くらいの少年。〈白〉。

初期所持品…旅人の指輪、白いシンプルなコートなどの衣服、フリッサ（刺突にも斬撃にも適した片刃の大剣）

妹（16）…雪奈

・オルファール

エレイスガイアの創造主。霊樹リヴァエルのある花畑に、幽霊のように存在している。

弱っていて、修太と啓介に「神の断片」を集めるように頼む。

姿は十五歳ほどの少女で、銀髪と淡い青の目をした恐ろしいほどに綺麗な顔をしている。服も白一色。

・フランジェスカ・セディン（22）

肩までの青みがかった黒髪と、藍の目をしている。〈青〉。左頬に切り傷があるせいで、更にきつそうに見える。

王都の鍛冶屋の一人娘。

パスリル王国王立騎士団の第三師団の副団長。

ユーサレトのことを尊敬しているが、恋慕しているわけではない。緑柱石の魔女に月光の呪いをかけられ、夜になるとポイズンキャットになってしまう。（ポイズンキャットになる時、何故裸にならないのかは、身に着けているものも一緒に変化するという設定だからと回答しておきます）

装備品…長剣（カットラスを想像してます）、騎士団紋章入りのマント、簡単な荷物が入った鞆など

・神竜クロイツェフIIサーシャリオン

影の化身。色々な姿に変身できるモンスター。

神竜の姿が本当の姿。

性別については秘密にしておこうかな。

茶目つけ溢れる、神様の側近みたいなお人です。

第三話より登場。

・グレイ(32)

海賊船に囚われていた修太を助けてくれた冒険者で、「賊狩りグレイ」の異名を持つ。感情をどこかに置き忘れてきたような、黒狼族の男。

黒髪琥珀色の目、高身長。犬か狼みたいな黒い尻尾あり。端正な顔立ちをしているが、表情がほとんど変わらないのでむしろ怖い。煙草と酒を嗜む以外、趣味らしい趣味なし。武器は斧槍のハルバート。

故郷から送られてくる成人したての子どもの面倒を見ることが多く、見た目と違って面倒見が良く、子どもには甘い。が、見合い目的で送られてくる同族女性には辟易している。

サマルとは商売相手で、コーラルとは旧知の仲。

第四話より登場。

・ピアス・アーレイル(16)

銀髪と董色の目をした美少女。セーセレティー精霊国の冒険者。

将来はアイテムクリエートの店を開くのが夢で、その為にトレジャーハンターをして、アイテムクリエートの材料集めや、採集地の開拓をしている。

生活の為に冒険者をしているが、冒険者としての腕もなかなかのもの。だが、戦闘よりは補助の方が向いている。

第六話より登場。

・鋼コウ

鉄狼というモンスター。修太を親分と慕ってついてくる。

本来は二メートルはある狼だが、修太についていく為に、体のサイズを中型犬に縮めた。

灰色の毛皮と黄橙色の目をしてる。〈黄〉。吠えることで地の魔法を操り、襲われると体中の毛を鉄に変えて防御する。

・春宮雪奈（16）

啓介の妹。

見た目は天使のように綺麗だが、性格は悪魔じみている。ホラー映画が大好き。

話中、話題や回想のみに登場。

＜＜第七話登場

・フローライト

宝石姉妹の一人、〈蛍石の魔女〉。短い銀髪と紫の目をしたボーイッシュな女の子。

外見年齢は十四、五歳。一人称がボクなので、ますますボーイッシュである。

オルファールの加護が弱まった影響で力が弱まり、存在が希薄になっている。さすらいの湖という断片に寄りそうことで、なんとか存在が消えるのを防いでいたが、修太達が来たことで、封印の本の中に移る。

フランジュスカに、満月の夜だけ呪いを無効化する祝福を与える。

＜＜第十一話登場

・ガーネット

宝石姉妹の一人、〈石榴石の魔女〉。長女。

ウェーブのかかった長い赤茶色の髪と赤色の目をした、スタイル抜群の美女。外見年齢は二十歳くらい。貴婦人みたいに所作が綺麗。マイペースでお人好し。

寝ていないと存在を保つのが大変で、本体である宝石の姿になっていたところを、宝石と勘違いした人間がレステファルテ国の王様に献上してしまい、日祭りの賞品になっていた。

今は、封印の本の中で寝ている。

サブキャラについては、目次1でご確認下さい。

目次1にない分は、ある程度進むと、紹介ページを設けますので。

登場人物紹介2

＊第十二話までの主なサブキャラを紹介。
いつものように簡単です。

＜＜第八話登場

・エンラ

短い黒髪に青目。〈青〉。

黒狼族の女戦士。武器はボーガン。

・リンレイ

黒髪を三つ編みにし、黄土色の目をしている。〈黄〉。

黒狼族の女戦士。武器は槍。

・イエリ（52）

黒狼族のおっさん。武器はサクス。

灰色の短髪と黒目をしている。身長は170cm程度とやや小さめだが、細マッチョ。

薬屋を生業にしている為に屋内にすることが多く、肌は白め。やや目が悪く、眼鏡をかけている。しかし嗅覚に優れる為、ろくに見ないでも薬草の仕分けを出来る。

黒狼族の男にしては珍しく学者肌であり、同族の男からは軽んじ

られることも多い。

本人自体は飄々とした食えないオッサンだが、綺麗な顔立ちをしている為にちやほやされていたとか。皮肉げな笑みがたまに目につく程度で、優しそうに見えなくもない。

白い麻の服の上に、黒い長衣を着ている。紋様入り。
魔法を使えないが、魔法陣の知識はある。

・アリテ（13）

イエリが拾って育てている人間の少女。

黒髪に青目をしているが、右目は傷があって潰れている為、常に包帯をしている。

イエリをお父さんと呼び、薬屋の手伝いをしている。歳は若いが、調合の才能があり、治療魔法の使える〈青〉として治療師をしている。ときどき近所の治療師（60代の婆で、ニケナイ）の所に見習いに行く。

線が細くて弱々しい為、イエリが鍛える名目で武術の基礎をさせているが、戦士に育てる気はないらしい。

＜＜第十話登場

・ジャック・ハーヴェ（27）

金髪金目、褐色の肌をした見た目が派手な青年。

飄々とした食えない感じだが、人の良い笑みを浮かべる商人。

珍品蒐集家で、豆占いと称して当たりが良さそうな人間を選別していて、修太達に目を付けた。旅人の指輪を奪うのに成功するも、アジトを突きとめられてボコボコにされる。

衛兵に突き出さない代わりに、変わった話を披露し、さらには連

絡先を渡して、買ってくれと言い出す始末。
色々と図太い、ある意味商人らしい商人。

第十二話 迷宮都市ビルクモーレ..1 価値観の違い

常に踊りや歌とともにあるという民が住むセーセレティー精霊国は、緑鮮やかな土地だ。

レストファルテ国が砂漠の国なら、セーセレティーは亜熱帯の国といったところだ。市場には色とりどりの果物が並んでいて、野菜や肉よりも多く見られた。主食はポルケと呼ばれる蒸した芋らしいが、果物メインで過ごす者も多いのだそうだ。

蒸し暑く、レストファルテとはまた違う暑さの国である。

修太はこの国に入ってから、カルチャーショックでくらくらしていた。

（まさか、啓介を不細工呼ばわりする奴に会うことがあるとは……）
セーセレティー精霊国では、ぽっちゃりした容姿——ぶっちゃけ肥満体形の方が“美人”なんだそうだ。

恐ろしいことに、痩せ型で素晴らしい美少女にしか見えないピアスは、ここでは“不細工”になってしまう。痩せ型が揃っている修太達のパーティーは全員揃って“不細工”揃ってわけ。

（なんて恐ろしくて、腹の立つ国だ……）

フランジェスカ曰く、この国は熱帯雨林が荒れ地しかない上、果物の方が多く実る為、消化に良いから自然と痩せ型が多い。だから太っている者は、たくさん食べる余裕のある金持ちということを示し、それ故に、そういう体型の者が美人と考えられているのだそうである。

その講釈を聞いたピアスは、莖色の目をまん丸にした。

「ええ！？ うちの国の“美人”は世界標準じゃないの！？」

「残念だが、極少数例だ。はっきり言おう。私の価値観では、ピアス殿は、最上級格の美少女だ。他国では気を付けるのだな」

フランジェスカの重々しい言葉に、ピアスはよろめいた。白い肌がカッと赤く染まる。

「び、びび、美少女お!? なにそれ。そんなこと、言われたことなんかないわよ! きゃああ、かゆい!」

頬に手を当て、ぶんぶん頭を振りだす。

「ピアスから見て、フランや啓介、 그레이はどう見えるんだ?」

修太はこの土地の人間の目で見たらどうなるのだろうと、単純な疑問を覚えた。自分のことは混ぜない。答えを聞いたら褒められても褒められなくてもどっちでも泣きそうだ。

「シューター君からだど、どう見えるの?」

先に訊かれた。

「まず、俺は普通だな。自分の国じゃ、だけど。で、啓介は美形な方だ。とりあえず、俺はこいつが女にもてる余波で色々面倒事に巻き込まれてた。それくらいには容姿は良い。フランは、性格さえ目をつぶっておけば、美人だと思う。 그레이はどう見ても格好良い大人だろ。俳優でも食えると思う」

修太の率直な意見に、褒められた三人の空気がぎこちなくなる。啓介とフランジェスカは言われ慣れているのかもしれないが、 그레이はやや動揺したようだ。

「……格好良い大人? 俳優? お前、目がおかしいんじゃないか? 俺は怖いとしか言われたことはない」

心から疑うように問われた。

「なまじ顔が良いから、無表情なせいで怖いんだよ。あとは空気? それで愛想良かったらもててるんじゃない?」

「シュウ、もうちょっとオブラートに包もうよ」

横からやんわりと啓介が口を出す。

流石にずばずば言いすぎたか。

「う、わりい。別に馬鹿にしてるんじゃないからね?」

だいぶ上にある 그레이の顔を見上げ、謝っておく。くそう、首が痛い。

「いや、俺が訊いたんだから、それは構わんが……」

苦々しい声だ。信じられないらしい。

ピアスはぼかんと全員の顔を見て、難しい顔をする。

「そうねえ。あたしから見ると、グレイは格好良い男の人で、フランさんは格好良い女の人、ケイは面白い雰囲気の人で、シューター君は目付きの悪い子どもで、今のサーシャちゃんは可愛い！」
そして、ピアスは、未だ十五歳程度の少女姿をとっているサーシヤリオンに笑顔を向ける。

「おい、待て。何で俺だけその評価!？」

修太は思わず声を荒げる。

予想よりひどい結果だったんだけど。

ピアスはからから笑いつつ、右手をひらひらさせる。

「実際に目付き悪いじゃない。ぶっきらぼうだけど、意外に親切で優しいところもあるのも知ってるわよ？ ケイがフェミニストな態度なら、シューター君は、近所のお兄さんみたい！」

「……さいですか」

近所の兄ちゃん扱いだよ。

「分かりにくく気遣いするでしょー？ 花の石鹸買ってきてって頼んだら、あたしのだけじゃなくてフランさんのも買ってきてたし」
うりうりと、ピアスが左肘で修太の肩当たりを小突いてくる。

「女子ってそういう差別は気にするだろうが！ 伊達にこいつの面倒事に巻き込まれてねえんだよ、俺は！」

照れもあって、くわっと怒る。

「そんなに言わないでくれよ、へこむから……。気付いてなかったんだよ……」

啓介がずどおんと影を背負いだした。修太は後ろ頭をかいて困る。
「ああ、悪かったって、落ち込むなよ。お前が気付かないのも無理はねえんだ。雪奈の陰謀が八割で……いや、なんでもない！」

うおっ、なんだ、背筋がゾツとしたぞ！

その辺に啓介の妹・雪奈が隠れているのではないかと思い、修太

は腕を押さえて、きよろきよろと通りを見回した。いそうで怖い。

「雪奈がどうかしたの？」

「いや、なんでもない、なんでもないって！ あんま訊くな、俺が呪われる！」

「え？ あ、うん？ 分かった」

必死に言うと、啓介は戸惑い一つも頷く。

奴ならやりかねん。自分の悪い点を大好きな兄に知られるくらいなら、世界が違かろうと呪ってくるだろう。出来そうで怖い。

修太は大急ぎで話を変える。

「ええと、そうだ。啓介が普通っていうのは分かるとして、なんでこの二人は格好良い？」

「簡単だよ。兵士職は格好良いになるの。だって、鍛えてるんだから太るわけないでしょ？ 筋肉ついてれば、それだけでも印象変わるんだから。ケイは見た目が優男って感じだから、人によっては不細工かもね？ シューター君は、そのまま成長したら完全に不細工かな！」

そんな快活な笑みで言わないでくれ。泣くぞ。

「ケイ殿が不細工……。それはない。どう見てもそれはない。なんという国だ、ここは」

何やらフランジュスカがぶるぶる震えている。ショックを隠せないようだ。

「あはは、あたしだってびっくりしてるんだから、そんなにびびらないでよお。さて、と。じゃあ、話しておいた通り、あたしはここ、境町フェデクで一旦別れるわね？ 一度アリッジャの街にいるおばばに荷物を届けて来ないと。それに旅に出ることも伝えなきゃ、心配かけすぎて怒られるからさ」

そうなのだ。双子山脈の東側を抜ける街道を抜け、国境を越えてすぐの町、このフェデクで、ピアスは修太達と一度別れて、西の方にある街に行くと言っていた。後から迷宮都市ビルクモーレに来るから、冒険者ギルドで落ち合おうという話で纏まっていたのだ。

そして、ピアスだけ単独行動が心配という啓介や、モンスターを使えば移動が楽だからついていくというサーシャリオンの三人で、別行動をとることになった。

全員でアリッジャまで行っても良かったが、修太達は先に行って情報収集した方が便利が良いということになったのだ。流石は軍人だけあって、その辺の合理的な考えはフランジエスカは頼りになる。フランジエスカは〈黒〉である修太の側にいないと夜になった時に困るし、鉄狼のアイアンウルフコウは修太から離れないし、グレイも今のところ名を呼ぶまでに“認めて”いるのが修太だけなので、自然とこうなった。正直、不安なメンツだ。フランジエスカとグレイが喧嘩したらどうしよう。修太が止めようとしたら、きっと巻き添えくらって死にそうな気がする。

場のムードメーカーたる三人がいなのは不安でしかないが、仕方がない。先に行こう。

「じゃ、啓介、そっち任せた」

「おう。シュウも無茶しないでのんびり行けよ」

修太と啓介は、右の拳を軽く突き合わせて健闘を称え合う。

そして、ちょうど十字路になっている道で、啓介達は左に行き、修太達はまっすぐに北を進んだ。

「とりあえず、今日はここで一泊だ。宿を探すぞ」

「ああ」

「……………」

「オン！」

フランジエスカの言葉に、修太は返事し、グレイは相槌をして、コウは元気良く吠えた。

第十二話 迷宮都市ビルクモーレ..1 価値観の違い（後書き）

目次を新しくして、また自己満足小説、のんびり再開です。

通勤や登下校の暇潰し程度の気軽な気持ちで読んで頂ければ嬉しいです（＾＾）

2 円月亭

結論から言えば、喧嘩にはならなかった。

ただし、フランジェスカとグレイとコウとの迷宮都市ビルクモーレまでの旅は、ものすごく気まずかった。

修太が魔力欠乏症の影響ですぐにへばるので、ピアス達と別れた境町フェデクからは、徒歩ではなく“貸しグラスシープ”を利用した。グラスシープっていうのは、緑色の毛をした羊で、毛が草みたに見えるからそんな名が付けられている。日本での牛かサラブレッドの馬くらいの大きさはある羊で、大人しい上に帰巢本能が強いから、セーセレティー精霊国では、よく旅人の移動手段になっているんだそうだ。ただし、逃げ足だけはとてつもなく速いので、元の場所に戻るまでにモンスターに襲われると、その逃げの本領を発揮して、すさまじい勢いで駆けだすらしい。

そんな羊が一般的に飼われているこの国では、足の速い人のことを「グラスシープの逃げ足のようだ」というらしい。褒めているのかけなしているのか、今一よく分からない言葉だ。

まあ、羊のことはいいのだ。問題は、貸し羊に乗っているのが修太だけということだ。

慣れている人は自在に操るそうであるが、フランジェスカは馬には乗れてもグラスシープには乗ったことがないから歩いた方がマシと言うし、グレイはそんなものに乗るより自分で走った方が早いという珍回答をくれたから、つまるところ修太は荷物扱いで羊に乗せられたわけである。

すれ違う旅人や行商人の微笑ましいものを見る視線の痛いことといったら……！

背中に布を敷いただけで、ふかふかしてかなり乗り心地が良い上、

揺れはあっても振動は羊毛に吸収されてほとんど届かないので、さまざまに快適であったが、とにかく居たたまれなかった。ここに啓介がいたら、あつという間に羊を乗り回して、きゃいきゃい一人で騒いで、微笑ましい視線を全部かつさらってくれただろうに……。

いつも啓介というから、視線は啓介に行き、舞台脇の椅子か机レベルの扱いの普段からしたら雲泥の差である。かといって、歩くのは遅いし体調を崩すから駄目だと言われるし。

ここに来て、これほど自分の体質が嫌になったことはない。

修太はコウがグラスシープの足元を駆けるのを羨ましい思いで見ながら、心の中ではうめいていた。

最初は魔動機のバイクに乗っていたのだ。だが、エルフしか持たない品だからどこで手に入れたとか、売ってくれないかと、通りすがりの商人がうるさかった。それさえなければ、羊なんかに乗らなくて済んだのに。

そして、更に修太をいたたまれなくするのが、家族での旅に見られている点である。詳細は簡単だ。グレイが父親、フランジェスカが母親、修太が子どもで、コウがペットの犬。ふふふ。どうだ、分かりやすいだろう。

グレイはどうでも良さそうに流していたが、フランジェスカはこんなでかい子どもを生んだ覚えはないと不機嫌になった。確かに、二十代に見えるフランジェスカの年齢を考えると十二歳くらいの見目の修太は子どもにしては不自然ではある。レステファアルテでも、姉弟と勘違いされたくらいの年齢差だ。

つい、何歳なのかと聞いたら、二十二歳だとの返事がきた。二十五くらいかと思っていたと内心で呟いたところ、顔から何を考えたのか分かったのか、拳骨を一つ貰った。女に年齢を問うておいてそれか、と、冷たい声で言われた。

どちらにせよ、修太が子どもとなるとフランジェスカは十歳かそこから子どもを産んだことになる。無理だろう、幾らなんでも。しかしここは地球ではない。念の為に結婚適齢期を聞いたら、早くて

十五歳だと言われた。ついでに、二十二歳はややいき遅れだ悪かったなと理不尽にもまた拳をもらった。

相変わらず嫌な奴である。

とにかく、すれ違った人で勘違いした人にフランジエスカがそう答えたら、連れ子ですかい？ とグレイを見て言った。なんてしづといんだ。だが、グレイの年齢ならいてもおかしくはないので、そう思っても仕方がない。

ただの護衛だとグレイが答えたら、すれ違った人は、無愛想な感じがお二人にそっくりなのにと失礼なことを言って去っていった。お陰で、またフランジエスカが不機嫌になったわけであるが。

そんなこんなでビルクモーレまで一週間かけてやって来た三人と一匹は、町に入る際にも門番と似たようなやり取りを繰り返す羽目になった。

「だから、俺をにらむなっの」

「うるさい。貴様が悪いんだろう。まったく、これだから〈黒〉は……」

フランジエスカは苛立ち紛れについてというように零して、ハッと口を押さえた。パスリル王国での差別用語が、無意識に出てしまったらしい。

ちらっとグレイがフランジエスカを琥珀色の目で一瞥する。

「お前、もしかやパスリル王国の出か？」

「……………」

「別に、そうだと分かったからといって、レステファルテに突き出したりはせん。だが、この国にはそういう差別は存在しないし、この都市では特に差別は禁止されている。ダンジョンで稼いでいる町だ。冒険者なら身分も種族も問わん。だから気を付けろ、町を追われたくなければな」

淡々とした注意に、フランジエスカは僅かに眉間に皺を寄せる。

「……すまん。今のは、ただの言葉の綾だ。私は認識を改めている。以後、気を付ける」

どうやら修太に向けても謝ったらしい。一瞬、フランジェスカの視線がこつちを捉えた。

喧嘩にならなくてほっとした修太は、迷宮都市ビルクモーレの町並みを眺める。グラスシープは町の前で解放したので、今は歩きだ。遠くから見えた町は防壁に囲まれていて、中に入ると道の両側にびっしりと家が建ち並んでいた。まっすぐに伸びた大通りは、白い石で舗装されている。この辺りでは白い石が採れやすいのかもしれない、防壁も白い石製だった。

「すごいな。全部商店なのか？」

まっすぐに続く道の両側が全て商店のように見えるので、修太は感心して声を漏らす。ここだけショッピングモールみたいだ。

「通りに面している家だけだ。あっちの方は、牛や羊などの放牧地と畑と、ずっと奥に住宅地がある」

グレイが低くかすれ気味の声で、ぼそぼそと言った。その指先が左を示す。

商店の向こうは、放牧地と畑ということか。それは見てみたい。

「じゃあ、こつちも？」

右——方角で言うなら東を示すと、グレイはすぐに答えた。

「門の側が倉庫街になっていて、それ以外は住居区だ。ただ、この道をまっすぐ行った先にあるダンジョンの入口付近の右手側は、まるまる冒険者ギルドの区画だ。緊急時の治療師や薬師、ヒーラー医師も常駐している」

「ほう、面白い造りの街だな」

フランジェスカがしきりに頷いている。

「宿ってどこにするんだ？ 冒険者ギルドの宿舎を使うのか？」

境町フェデクで宿泊する時はそうしていたのを思い出し、修太が問うと、グレイは首を振った。

「この町のギルドには、宿舎はない。町に金を落とせと、そういうことらしい」

端的だが分かりやすい理由だ。

そして、三人と一匹は、商店に入ることはなく、えんげつてい〈円月亭〉という名の宿に入った。

「十五年ぶりだが、まだあるとはな」

グレイが、どこか感慨深げに呟いた。

（十五年ぶりにこの町に来たってことか？ イェリが、グレイにとってはタブー扱いしてた町だ。何かあったのかな？）

憶測をしてみる修太だが、必要なら話すだろうと思って、特に何も訊かないでいる。フランジェスカもだ。フランジェスカにも聞かれたくないことがあるからか、あら捜しをするような真似はしないみたいだ。無理に訊いて藪蛇になる方が面倒ということなんだろうと推測しておく。

宿の扉を開けて中に入ると、左手にカウンターがあった。

「いらっしやいませ」

カウンターの向こうに腰掛けた四十代くらいの女性が、愛想の良い笑みを浮かべて挨拶した。ぽちちりと茶色い目をしたぽちちりした人で、セーセレティー人に多い銀髪をお団子に結っている。それに、あちこちにじゃらじゃらとアクセサリーをつけているから、やはりこの国の人間なんだろう。

茶色い目は、人間という魔力を持たない者、つまりノンカラーに分類されている。この人もそうらしい。

なにげなく客を見た女性は、目と口をぱかっと開けた。信じられないというように、グレイの顔を凝視する。

「……もしや、グレイ……かい？」

「久しぶりだな、ヘレン」

グレイがあっさり返すと、ヘレンはがたと椅子を蹴立てて立ち上がる。そしてカウンターを回ってくるや、グレイに抱きついた。

「ああ、グレイ！ 生きてて良かった！ あんたの親父さんがあんな死に方した後、いきなり宿を出てくなんて言い出すんだもの、あ

たしはてつきり、荒野で自殺でもする気なんじゃないかと、ずっと気に病んでたんだ」

目から丸い水の粒が次々に零れていく。

グレイは無感動にそんなヘレンを見下ろす。

「ただの客を覚えているとは思わなかったが、気を使わせたのなら悪いことをした」

「そうだよ！ もっと甘えてくれて良かったのに。ほんとこの子は！」

グレイから身を離すと、ヘレンは太い手をグレイの頭に伸ばし、ごしゃごしゃと黒い髪をかき回した。

「図体もでかくなっちゃってさあ。何、家族の紹介にでも来たの？」

「「違う」」

グレイの声と、フランジエスカの不機嫌声が被った。

「俺はこの子どもの護衛だ。この女もそうだ。この犬はこいつの手下だ」

簡潔に説明するグレイ。

いや、コウが手下って何。せめてペットでとめてくれませんかね。

「ええ？ この子ども、貴族の子か何かなのかい？」

「違う。後から三人人数が増えるが、そいつの連れだ。俺がこいつらのパーティーにくつついている形になる」

「仕事かい？」

ヘレンは見定めるように、フランジエスカと修太を見る。

「そんな感じだが、迷宮に用がある」

「あんたが“認めてる”人はいろのかい？」

ヘレンはどこか心配そうだ。黒狼族の風習を知っているらしく、確かめるように訊いてきた。

「この子どもだな」

グレイが迷いなく答え、ヘレンは目をパチパチさせた。

「ええ？ この子？ そんなに強いのかい？」

「ふふ、まさか。弱いにも程があるぞ」

フランジェスカが辛抱たまらんとするように、笑い交じりに口を挟んだ。

「うるせえよ」

修太はフランジェスカをにらんでから、ポンチョのフードを外し、挨拶する。グレイが信用している人だから、危険はないと判断した。「初めまして。俺は塚原修太だ。修太と呼んでくれ」

「私はフランジェスカだ。どうぞよろしく」

苗字までは名乗らず、フランジェスカはそう言って軽く会釈した。フランジェスカもフードを引き下ろしている。

「藍色に近い〈青〉に、漆黒の〈黒〉。なるほどねえ。あたしはこの店主の妻、ヘレン・ロブランだよ。旦那はルコッツで、息子はロディだ。――グレイ、勿論泊まっていくんだろ？ 何泊だい？」

ヘレンは自分も名乗り返してから、グレイの方を見た。

「さてな、分かんが……。とりあえず一週間としておこう。その頃には連れが増えるかもしれんからな、部屋を移すかもしれない」

「その時は言っておくれ。部屋はどんな感じにするの？」

「三人部屋で、仕切りを一つ置いておいてくれ」

「男女で部屋を分けていないのかい？」

「護衛だから必要ない」

グレイの返答に、ヘレンは確認をとるようにフランジェスカを見た。フランジェスカが迷いなく頷くのを見て頷く。

「分かったよ。じゃあ三人部屋で一週間ね。朝と夕のご飯がついて、三人分で一泊900エナだから、6300エナだよ。前払いで宜しくね。途中で出る時は、最終日から三日前までは残りの代金は払い戻すけど、三日以内は返金しないから気を付けておくれね」

「引き落としでいいか？」

「もちろんいいとも」

カウンターの後ろに戻ったヘレンは、台の中から魔法陣が書かれた赤色の水晶みたいなものを取り出した。そして指先を当てると、

空中に赤色の文字が投影される。その文字にタッチパネルのように触れて、次々に画面を切り替えていき、やがて止まったところで、ヘレンはグレイに言った。

「じゃあ、この水晶にカードを当てておくれ」

グレイが冒険者ギルドの識別カードを取り出し、カードについている青色の水晶を赤色の水晶に当てる。魔法陣の色が青色に変わった。

「認証キーをよろしくね」

「ああ」

今度はグレイが魔法陣に触れる。すると、赤色の水晶が一瞬だけ光った。

「はい、引き落とし終わり。後でギルドで確認しておいてね」

「分かった」

「じゃあ、はい、これ、鍵。一応、部屋に簡単な利用説明書を置いてるけど、口頭での説明があるなら部屋に荷物置いてからまたおいで。あと、仕切りは後で持っていくよ」

「分かった」

部屋の鍵を受け取ると、グレイは行くぞとだけ言って、奥の階段を上り始めた。修太やフレンジエスカも続き、コウも続こうとして、ヘレンが呼び止める。

「ちょーっと待った。犬連れなら、300エナ追加だよ。掃除が大変だからね」

「すまん、忘れていた」

戻ってきたグレイが、また引き落としをして支払った。

3 ダンジョンとは

部屋は結構広かった。もっと狭い部屋を想像していたので、修太には嬉しい誤算である。

ベッドが三台並び、間にはサイドテーブルが二つ置かれている。入口側には丸テーブルが一つあり、椅子が三つあって、そのテーブルの上には説明書が置いてあった。

他にも、クローゼットが一つと箆笥が二つ置いてあり、窓際には、洗濯用なのか、ロープが壁に埋め込まれた金具に縛られていた。

「居心地良さそうだな」

部屋を見た印象を、修太は呟いた。

窓際にはフランジェスカ、扉から近い真ん中にグレイ、壁際に修太という陣取りをした。修太にはよく分からないのだが、出入り口に近い場所にいるのが護衛の位置なんだそうで、窓際は駄目だとよく壁際に追いやられるのだ。

寝台はふかふかしていて、シーツからはハーブと日向のにおいがした。眠気を誘ってくる。

「値段にしてはいい宿だ。部屋の立地も悪くない。避難経路もまあまあだな。食事の時間と風呂場の位置を確認し、洗濯のことも訊かねばならんが……。ふむ、私はエタール語の文字は不得手なのだ、会話はドワーフに教わったから問題ないが……」

説明書をひらつかせ、フランジェスカは呟いた。

「は？ エタール語？」

修太は目を白黒させた。何の話か分からない。

「セーセレティーやミストレインは未だにエタール語を使う、別文化圏なのだ。レステファルテとは違う」

フランジェスカが何を言っているのか、修太にはさっぱり分から

ない。

「何か違うのか？ 俺には普通に聞こえるし、その文字も読めるぞ？」

「……貴様に文字や言語の違いが分からない理由は知らんが、エターナル語というのは、永久青空地帯に浮かぶ^{エターナル・ブルー}霊樹^{れいじゅ}リヴァエルが、まだ地上にあった頃から存在する言語らしい。人によっては古代語とも呼ぶ」

「ふうん」

霊樹リヴァエルの葉っぱ、すげえな。葉っぱ飲むだけで、読みと会話が出来るって、まるで神話みたいだ。

「ま、書けるかは知らねえけど」

「書けるのではないか？ ギルドに登録する際、ケイ殿はすらすら書いていたぞ？」

「へえ、後で試してみるか」

それに意識して聞き分け出来るようにしておこう。日本語を区別して話せたのだから、違いも分かると思うのだ。

そして、修太はフランジエスカがテーブルに置いた説明書を手に取ると、パラパラと捲る。

さっきフランジエスカが指摘した部分を、声に出して読む。

「食事の時間は、朝は二の鐘と三の鐘の間。夜は六の鐘半から八の鐘半まで。うわ、何言ってるのか意味が分からん」

「鐘で時間を示している。鐘と鐘の間は約二時間だ。たいてい、一の鐘は、日の出に鳴るものだ」

「なるほどね。時計はないのか？」

「時計？ そんな高価なもの、王侯貴族くらいしか持たぬぞ」

「そうなのか……。えーと、続けるぞ？ 風呂場は、男女別に離れにある。建物を挟んで別々にあるので、看板を見て注意すること。使用料は宿代に込みなので別途にはとらない。共用なので、どうしても一人で使いたい時は、自室に盥意するので受付で言うこと。こちらは別料金で50エナかかる。洗濯を頼む際は、クローゼット

に入れている袋に入れて従業員に渡すこと。その際、手間賃を一袋100エナとる。洗うだけでなく干して畳んでおくので、四の鐘が鳴る前に出した分は、その日の夕方に受付に取りに来ること。それより後は翌日になる、だそうだ」

そこまで読んで、グレイに宿代を出してもらったことを思い出した。こっちで出すのが筋だろうと思い、旅人の指輪から、財布や、宝石や天然石が詰まった石、岩塩を詰め込んだ袋を取り出す。

「そうだ。グレイ、ここの宿代、こっちが出すよ。えーと、6600エナだったよな。白金貨だっけ？ 面倒だな、金貨で出していい？ 嫌だったらこっちの石でもいいけど」

黙々とトランクの荷を広げていたグレイは、ちらっとこちらの方を見た。興味を覚えたのか、こっちにやって来る。

「見事なものだな。宝石はともかく、媒介石ばいかいせきがこんなにあるのは初めて見た」

「媒介石？」

「この石のことだ」

「天然石のこと？」

修太からすると、綺麗だけれど宝石に比べればずっと価値の無い石だ。修太が眉を寄せると、無言で修太を見下ろしたグレイは、小さく息をついて、隣の椅子に座った。

「言っている意味が分らん。天然石？ 拾えばそんなもの、どの石も天然だろうが」

「……いや、そうだけど。俺の故郷じゃ、こういう、宝石より価値はないけど見た目が綺麗な石のことを、天然石って言って、その辺に落ちてる石ころと区別してたんだ」

フランジェスカも、残っている椅子に座った。

「待て。ということは、貴様の故郷では宝石の方が価値があるのか？」

「はあ？ 当たり前だろ。こういう、透明度の高い綺麗な石は、アクセサリーとして価値が高いんだ」

なんか混乱してきた。

「う。なんでそんなじつとこっち見るんだよ。こえーんだけど」

どっちも無愛想なので、眼光が鋭くて怖い。修太は椅子の上で身を縮める。

「……どうも、お前の故郷の物と、この物とでは価値観がだいぶ異なるようだな。石鹼がこちらでは高級品なのに対し、お前の土地では10エナ程度で買えると言っていたし」

グレイが呟くように言うと、フランジエスカが信じられないというように目をむいた。

「そうなのか!？」

「高価な石鹼だと、500エナくらいするようなものもあるけど、庶民はもっぱら30から50エナ程度の石鹼を使うな。10エナくらいのやつは、手を洗う用の安いやつが大半かな」

シャンプーやリンスの値段を思い浮かべながら、修太は答える。

「手を洗う用の石鹼?　なんだ、使用法に区別まであるのか?　信じられん。王侯貴族でもそんな区別はせんだろう」

フランジエスカの動揺したような声に、修太は落ち着かなくなる。

この冷静な女を動揺させる価値観って……。

「ええと?　じゃあ何、俺が言った価値観と違うってことなら、こっちは天然石の方が高価なのか?」

グレイが静かに首肯する。

「宝石は、宝飾品としては価値がある。だが、こちらの媒介石は、アイテムクリエートに必ず必要になるから、高値で取引されているのだ。魔法の媒介にも使われるらしい。特定のモンスターを倒すことで手に入るからな、ダンジョンでなら多く入手しやすいが、それ以外では入手が困難だ。それに比べて、宝石は掘れば入手出来るから、危険度は少なく、価値が低めというわけだ」

宝石や媒介石を手にとって、比べてみせながら、グレイは言った。静かに元に戻し、指先ほどの媒介石を手にとって言う。

「簡単に言えば、こちらは魔力を多く具有している石で、宝石はそ

うではないというのが、一番大きな違いと言える。これくらいの大
きさで2000エナくらいが相場だな」

「はあ！？　なにそのボロイ商売！」

すっとんきょうな声が修太の口から飛び出た。だいたい日本円に
して二万円になるのだ。なんだこの石、こわっ。

レステファルテ国で、フランジエスカに宝石や天然石入りの箱を
見せて、そんな宝の山を見せびらかすなと叱られたことをふと思い
出した。あの時は、天然石が宝なんて大げさだと思ったただけだった
が、価値が分かれば恐ろしく思えた。

「それくらいでなくては、誰も危険なダンジョンに潜ろうなど思わ
ん。危険に見合った利益が手に入るから、潜るわけだ」

グレイは分かりやすく講釈してくれた。フランジエスカに比べて、
なんて親切なんだろう。

「でもさ、幾らダンジョンでも、モンスターを狩ったら絶滅しちま
うだろ？　何でこんなに発展してるんだ？」

修太が根本的に不思議な点を問うと、グレイとフランジエスカが
また押し黙った。フランジエスカが頭が痛そうにしているので、ま
た怒られるのかもしれないと修太は内心で身構える。

しかし、疲れたような息を吐くだけで、フランジエスカはやや皮
肉気味に言った。

「無知というかなんというか……。貴様の世界にはダンジョンはな
いのか？」

「人間と動物、海の生き物とかそういうのしかない。モンスター
はいないし、ダンジョンなんてものもないし、魔法だって存在しな
い。そういうのは全部、架空の物語の中のものだ」

続けて言う。

「フランには言っただろ。俺やケイが違う世界から来たって。バイ
ト帰りに肝試しに行くっていう啓介に付き合う羽目になってトンネ
ル歩いてたら、たまたまこっちの世界に迷い込んだんだ。双子月が
重なる時って、ときどき異界からの迷子が来るんだってさ。オルフ

アーレンが言ってた」

ここまで言うのと、なんだか愚痴りたくなって、修太はうだうだと続ける。

「次に繋がるのは三百年後だから、俺らはもう帰れない。その上、この世界は滅びかけてて、啓介は面白不思議現象が見たいって手伝い買って出た。お陰でこうして旅をしてるわけだけど。オルファールンには色々と物をもらって、言葉も通じるようにしてもらって、最終的には霊樹リヴァエルのうろに突き落とされて、あの森で目を覚ましたらあんたがいたわけだけど」

「そういえば、そんなことを言っていたな。というか、貴様、帰れないのか？ それは初耳だ」

フランジェスカが怪訝そうに問う。

「三百年も生きられる人種じゃないもんで。医療技術が発達してるから、平均寿命は百歳程度か？ 長いと百四十歳まで生きる奴もいるが、貴重な例だな」

「ほう。ここは七十まで生きたら長生きな方だな。モンスターに殺されるか事故死か疫病か、時には旱魃で餓死することもある。まあ、モンスターに殺害される確立の方が高いな。その次が盗賊で、次が疫病ってところか」

「うん、まあ、これだけ衛生面が悪いとな、そりゃ疫病で死ぬよ。往来に家畜の糞なんか落としくらいなら、掃除して、畑の肥やしにしちまえばいいのにな。汚物も一箇所にとめて焼却するとかさあ。石鹸で手を洗って、殺菌するのも大事だよな。やっぱ加熱殺菌しないと危ないよな……。つーか下水道くらい作れっての」

ぶつぶつ呟いていると、また二人が黙っているのに気づいた。うろんな目を向ける。

「今度は何だよ？」

「疫病は呪いの一種だろう？」

「は？」

大真面目に 그레이 が言うので、修太はぽかんと口を開けた。

「そうだ。死者の魂が天に行く時、身体から魂が抜け出る苦痛が呪いになって、それが満ちて、病を起こすと聞くが」

「はあああ？」

フランジェスカまでもが言うので、あんぐりとする。

疫病が呪いって、意味わかんねえ。

「なんだ、白教でもそういうのか？」

「その辺はどこも同じだろう。〈白〉崇拜が基本だ」

「なるほどな」

二人はしたり顔で言い合っているが、修太は頭を抱える。

「何だよその原始的な考えは。魔法とかあるくせに、意味わからねえ。いや、そういうのがあるからこそその弊害か？ いいか、疫病っていうのは、ウイルスが引き起こすんだ。人から人へ感染したり、ネズミや蚊から人へ感染したりする。俺はその辺は詳しくはないけど、ワクチンがあれば、たいていのものは治るようになった。そういうのが撲滅されたのは、最近だけだな」

「ふむ？」

「さっぱりだな」

「いいから聞け！ 疫病は、ある程度は予防出来るんだ。まず、衛生面を整える。通りに糞があるなんてのは駄目だ。不潔すぎる。汚水の水路も別に作るべきだ。そして、ゴミは一箇所に集めて、廃棄するようにする。生ゴミなんかを適当に積んでみる、におうしやっぱり不潔だ。そして、風呂には出来るだけ毎日入る。汚れを落とすってことだ。部屋の掃除や、洗濯もしなくちゃいけない」

「うむ」

フランジェスカは興味があるのか、真面目に頷く。

「それでも病気にはかかる。その時は、病人は病人で固めて、健康な人間は出来るだけ近寄らせないようにしなくちゃいけない。別に閉じ込めるわけじゃなくて、対処する人間を少なくして――出来れば、軽度の症状の人間が当たるといいんだが、そうして看病するんだ。窓を開けて換気して、衣服やシャツもこまめに洗う。滋養にい

いもの食わせておけば、それだけでも違うはずだ」

「しかし、家族なら病人を見舞うし、家族全員で看病に当たるものだろう？　でなくては冷たすぎやせんか？」

「そんなことしてみろ、一家全員、まとめて病にかかって全滅だ。健康な人間の役目は、病人のサポートで、病人が復帰した時に、生活できるように基盤を維持しておくことだ。ここで言うなら、せつかく治ったのに、畑が死んでましたじゃあ、今度は飢え死にしちまうだろ？　見舞いに来るのが悪いわけじゃないが、人から人へ感染する病の時は控えておくべきだ。でないと、移動時に他の町にも病を撒き散らすことになって被害が増す」

「なるほどな」

修太の言葉はフランジェスカには目からウロコのような話な上、今までの考えを打ち砕かれて衝撃を覚えたが、理屈としては通っているので、感心した。

ここまで喋った修太は、普段が寡黙なので疲労を覚え、ため息を吐く。

「で、なんでこんな話になったんだっけ？」

「確か、ダンジョン内のモンスターの絶滅を心配していたな」

「そうだよ、それぞれ」

つついここに來た経緯の愚痴など始めてしまったので、だいぶ反れた。

「ダンジョンの内部にいるモンスターは、外のモンスターと性質が異なる。擬似生命体というやつで、いわばモンスターの皮を被った核石といったものだ」

グレイが説明してくれたが、修太はよく分からなくて、眉を寄せた。

仕方ないなあというように、フランジェスカが付け足す。

「貴様、熊と熊の縫いぐるみでは違うものだというのは分かるな？」

「分かるに決まってるだろ。そこまで馬鹿じゃねえよ」
むすっとして返す。

「つまり、そういうことだ。熊の形をした縫いぐるみに、生命の代わりとなる石が入っている。熊の形をしているだけで、それは熊ではない」

「おお、なるほどな！」

それは分かりやすい。

「あのジャックとかいう商人が、ダンジョンは地の精霊が作ったと言っていただろう？ 世界の箱庭をどれだけ本物に似せて作れるかを競ったものだという話がある。地下にも関わらず、草原が広がっていたり、溶岩が流れる上の橋を通ることになったりと、色んな仕組みになっている。そして、モンスターは次から次に生まれる。どうも、一定量が減ると、その分が生み出される仕組みらしいな」

「このモンスターは、異物を襲うようだな、ここでは〈黒〉も役に立たん。そんな時に結界として使うのは、この、黒輝石だ」

グレイは天然石の詰まった箱の中、正方形に切られた黒い石を示す。

「正方形になるように置くことで、結界になるんだ」

「マエサマにもあった？」

「ああ、あれもそうだ。あそこで採れる石の表面に、黒輝石を砕いた粉末を塗布している。それだけで、結界になる」

「何で正方形？」

「俺は詳しくは知らんが、前に、結界を意味する魔法記号が正方形だと聞いたことがあるな」

グレイはちらつとフランジェスカを見た。

「その通りだ。子どもに持たせる魔除けのお守りにも、よく刺繍されている」

「へ」

それは面白い。

「結界に使うってメモがあったけど、どう使うか分からなかったから助かるよ。じゃあ、これは迷宮で使えばいいわけだ？」

「ああ。ただし、お前は留守番だな」

「何だよ!」

フランジェスカにくっつかかるが、鼻で笑って一蹴された。

「冒険者ギルドは十五歳から登録出来る。ダンジョンには冒険者でなければ入れない。つまり?」

「俺は冒険者じゃないから入れないってことか!？」

ずおーんと落ち込んで、修太は肩を落とした。

「なんだよそれ、やることなくて暇すぎなんだけど。つか、完全にお荷物だろ、俺……」

「何を今更。最初からそう言っているだろうが」

悪びれなく肯定するフランジェスカを、どぎつい目でにらんでおく。少しは慰めろよ、大人げない奴!

「そもそも、体調を崩しやすい人間を連れて行けるほど、ダンジョンは甘い場所ではない。こればかりは諦めろ、シューター」

「グレイまで……」

なんか、フランジェスカよりグレイに言われる方がダメージがかい気がする。フランジェスカの悪態には慣れてきているようだ。

「とりあえず宿代を払っとくよ……」

「今回は俺が出ておく。次回からはそちらで持て。どうせ使わなくて貯まるばっかりの金だ」

グレイは平然と言い、支払いを退けた。

おお。やっぱり格好良い大人だ。

「その代わり、これを少し見させてくれ。あまり目にしないから、珍しくてな……」

グレイが媒介石や宝石を示すので、修太はどうぞご自由にと箱を手で押した。

4 父親

冒険者ギルドには明日行き、今日はゆっくりすることになったので、修太は書店を探すことにした。

本は高価だが、どこの町にも一軒はあるらしい。グラスシープという巨大な羊がいる分、羊皮紙は他の国よりは安い方で、自然と本の値段も下がっているのだそうだ。

ちなみに、今までは触れなかったが、ここにはトイレットペーパーは存在しない。

レステファルテ国では使い捨ての木ベラー——木を薄く削っただけの板——がその代わりで、熱帯雨林が多い為に植物が大きいセイセレイターでは、手の平より一回り大きめの葉っぱをトイレットペーパー代わりにし、そのまま捨てる形になっている。迷宮都市ビルクモーレは下水道があるので、そのまま便所とは名ばかりの穴に投げ捨てるだけだ。穴に便器を置いているだけなので、水の流れる音が絶えず聞こえる。下水道ではなくて川にそのまま流しているような感じが近いかもしれない。まあ、レステファルテみたいに、地面に埋めた甕かめを便器代わりにするよりマシかな。におわないし。

日本で遊びに行くみたいないな感覚で外に出て行こうとしたら、ポンチヨをむんずと掴まれて止められた。

「護衛の意味を分かってない奴だな。そもそも、見知らぬ土地を子どもが一人でうろうろするんじゃない」

ええ。もちろん、掴んだ人はフランジェスカさんですよ。そうに決まってるじゃないすか。

「現地の子どもとならいいのか？」

うろんな目で返すと、意外にも肯定が返る。

「まあそうだな。どこが危険であるかないかの区別がつく者が側に

いるなら、私も止めん」

フランジェスカは少し考え、問う。

「なんだ、腹でも空いたのか？」

「フラン、お前、俺イコール食べ物とか思ってたんじゃないやねえだろうな？」

「思っているが？」

「ぐっ。まあいい、否定出来ないしな。書店があるなら行こうかと思ってる」

よく考えたら否定出来なかったもので、それについては流し、用件を言う。

「ついでに買出しにも行くか」

「あと、文房具と紙も買いたい」

「見かけたら買えばいいだろう。仕方ないな。貴様には花の石鹸を買ってきてもらった借りがあるし、今回は喜んで付き合ってやろう」

「……そりゃどうも。よろしく」

だから何でそう上から目線なんだ？

少し不満に思いつつも、あのことを一応は借りと思う程には喜んでいたのでと遠回しに知り、まあいいかという気分になった。

「グレイ殿はどうする？」

「ああ、俺も行く。煙草が切れた」

ハルバートを手に、グレイが答える。紙煙草の箱を振って見せた。何の音もしない。

「ワフワフ」

コウがじーっと修太を見上げ、尻尾をパタパタ振っている。修太と目が合うと、床に伏せて、目の上に前足を置き、哀れっぽく「クウン」と鳴いた。賢いというか、芸達者というか……。

修太は呆れた。

コウは賢く、行儀良くしなかったら放り出すと言った修太の言葉を正確に理解して、普段は賢い犬のフリをしている。とはいえ修太はペットに興味がないから、ついてくるならついてくるでどうでも

よくて、放任主義を貫いていた。

が、こんな風に訴えかけられると少しは良心がとがめるといいうものである。

「そんな風に可愛い子ぶらなくても、ついてくればいいだろ」

「ワンッ！」

パツと身を起こしたコウは、修太の足元に纏わりついてきた。

何でこんなに懐かれているのか、未だによく分からない。

（ついでに、犬用のブラシと毛を切るハサミも探してみるか）

砂埃のついたコウの毛を見ながら、修太は頭の隅でそう呟いた。

最初はただの気のせいかと思った。どうも視線を感じるのだ。何うような、確かめるような、じろじろと見る眼差しだ。

でも、しばらく街中を歩くうちに、そうじゃないと気付いた。

確信に変わったのは、全員で雑貨屋に入った時だ。

「店主、紙煙草は置いているか？」

グレイが店主のおじさんに訊いた瞬間、何故か店主の肩がびくりとはねた。

「え、ええ。置いてます。……なあ旦那、以前、この町にいたりしたかい……？」

五十代くらいの親爺は、そわそわと問う。グレイが頷くと、手を叩いた。

「やっぱり！ 黒狼族なのといい、ハルバートを持つてるのといい、似てると思ったんだよ。フレイニールさんとこの倅せがれ だろ？」

そこで急にしかめ面をした。

「今頃になって戻ってくるなんて、黒狼族ってのは情に薄いのかね？ 墓参りくらい、来てやればいいもんを。あの後、すぐに町を出て行っちゃまし、ザーダの旦那達もあんたのこと探してたよ。戻ってきたら教えろって、十五年も経ってんのに、未だに言いに来る」

言いながらも、後ろの柵から紙煙草を取り出し、ポンとカウンタ

ーに置く店主。30エナだよと付け足した。特に銘柄などは無いらしい。グレイが1エナ銅貨を三十枚、じゃらじゃらとカウンターに置くと、それを素早く数えて回収する。

「……あいつら、元気にしてんのか」

買った煙草の箱をその場で開け、ジッポライターで火をつけて遠慮なく店内で吸いながら、グレイは少しの沈黙の後、そう問うた。店主が文句を言わないのを見ると、これが普通なんだろう。

（フレイニールって父親の名前か？ あの後って何なんだろう。それに“あいつら”に良い印象ないみたいだな……）

何となく声のトーンが下がった気がする。

そちらに視線を向けないように注意しつつ、修太は日用品の棚を見る。スポンジ代わりになりそうな、ヘチマを乾燥させたような物や、新調したいタオルなどを籠に放り込む。他にも下着を買いたるところだが、この下着は木綿や麻の肌着と、細長い布を巻くだけのなんちゃって相撲まわしなので困る。上はいいけど下が困る。修太はトランクス派なのだ。面倒だからいっそのこと、作ってみるのもいいかもしれない。そこまで裁縫は得意ではないが、欲しい物が存在しないのなら作るしかないのだ。裁縫箱や布も買っていこう。布はないが、裁縫箱はセットで置いてあった。500エナか……。こんなもんかな？

「元気も元気だよ。まああの日から、100層より下には行かなくなっちゃったけど。今じゃ冒険者の間じゃ顔役みたいなもんかね。ザーダはよく一人で潜りに行くし、ヨーエは魔具屋のこの娘と結婚して、店やってるよ。たまに迷宮に潜るくらいだな。エルザはギルドの治療師^{ヒーラー}として詰めながら、ときどき迷宮に潜ってる」

「ふうん……」

訊いておきながら、グレイの関心は薄そうだ。

「俺が来たら教えるというのは、ここだけに言ってるのか？」

「いや、親しくしてる店には言ってるみたいだが。会いに行ってみよう。心配してるんだ」

「……どうだかな」

小さな声で呟いて、グレイは修太達の方を見た。

「フランジェスカがいるからいいな？ 俺は少し抜ける」

「分かった」

「おう」

フランジェスカが頷き、修太が片手を軽く挙げるのを見てから、グレイは隙の無い足取りで店を出て行った。

店主の苦々しい顔が少し気になる。

「つたく、愛想の無さは進歩してないねえ」

「おじさん、グレイの知り合い？」

修太の問いに、店主は首を振る。

「知り合いつていうか、客の一人だよ。どっちかというと、あのガキの父親と知り合いだ」

「フレイニールという人か？」

フランジェスカが口を出す。

「そうだよ。人間でノンカラーだったが、武の才に秀でててねえ。しかも陽気な男だった。この町であいつを嫌ってた奴なんていないんじゃないかな」

「へえ……」

駄目だ。想像がつかない。

「息子だって紹介された日にはおったまげたね。顔は似てたが、雰囲気全然似てなくてね。愛想が全然違うよ」

顔が似てるけど愛想がいい。無理。やっぱり想像がさっぱり出来ない。

「ハイレベルの冒険者だったけど、最後はダンジョンで死んじゃってね。ほんと冒険者ってやつは、どうしようもないよな。あんな死に方はしたくないね」

そこで喋りすぎたと思ったのか、店主はわざとらしく咳払いした。

「で、それ買うのかい？」

「うん。会計お願いします」

籠をカウンターに乗せ、修太は軽く会釈する。

そんな修太をじっと見つめた店主は、ここ最近でよく訊く台詞を口にした。

「ところで、坊主、あのガキの息子だったりするのかい？」

4 父親（後書き）

またもや汚いお話を書いてすみません。

ええ。冒頭の方の部分のことです。

以下は読まなくてもいいですけど、まあ、一応、豆知識みたいなものを書いておきます。毎度のことですが、興味がある場合は自分でも調べてみて下さいね。鵜呑みはよくありませんから。

木ベラと埋め甕については、考古学の分野から持ってきました。葉っぱとかそういうのは私の創作です。

木ベラ、えーと、木簡というものが奈良時代以降あるのですね。文字を書いて、刀で削ってまた使い、薄っぺらくなったものを、糞ベラとして使ってたわけです。事実かは分かりませんが、トイレ遺構から見つかるので、そう考えられています。トイレトーパーミたいなもんです。

で、埋め甕ですが。江戸時代にもあったのかな？

そのまんま、地面に甕埋めて、用を足してたんですね。

恐らく使用後は汲み取って捨てていたはずですが、詳しいことは私もよく分かりません。

川の上にトイレ作って、水洗便所もどきは、前に中国の山奥のドキュメンタリー番組で、そういうのが出てたから、書いてみただけです。

個人的に、世界の下着を調べたいです。うーん。せいぜい、ワイシャツが実は下着代わりだったことくらいしか男性下着の歴史は詳

しくないです。いや、詳しくても何かどん引きですけど。

これについては、朝のニュースで話してたから知ってるだけで…。

すごい不思議なのが、イギリスの民族衣装って男性はスカートじゃないですか、下着どうしてたのかなーって。あああ、すみません。これ逆セクハラですね！ ただの疑問です；

5 識字率の問題

まじでねえわ。

何かというと 그레이の息子と勘違いされて、修太は精神的に疲れていた。帰ってきたら、宿のおかみさんにまでこっそり訊かれたのである。

顔は似てないけど雰囲気こそっくりって、何、俺に喧嘩売ってんの？ 顔は全然駄目だけど、無愛想だねって言いたいのか？ 悪かったな、平凡面で！

書店で、歴史書や薬草調合の基礎、アイテムクリエイトについて書かれた本を見つけ、部屋でベッドに座って、熱心に目を通しつつ、関係ないところで関係ないことを思い出して、息を吐く。

そうしながら、気になったことを、買い求めてきた羊皮紙にペンで書き付ける。いちいち羽ペンの先にインクを付けなくてはいけないのが面倒臭い。

ちなみに、文字は書けた。エターナル語も常用語もどっちも。

そんな修太のベッドの側には、綺麗さっぱりしたコウが丸くなっている。井戸の水で洗った上で、毛をブラッシングして、一度切ったのだ。毛を切ったら素材になるとは聞いていたが、針金みたいな鉄の素材になるのかと思っていた。しかし丸い粒になって床にごろごろ落ちたので少し面白かった。ただ、それを集めて布袋に入れるのが面倒ではあったが。

そんな風に構ったのが良かったのか、満足げに丸まっている。鬱陶しくなくていい。

「面白いなあ。『はじめての薬草入門』。これなら俺でも傷薬程度なら作れそうだな。それにこっちの『カラースなら簡単に作れるアイテム作成』もさ、いいな。カラースなら血染めの糸で簡単な防護

付加の品が出来るとはね。俺の血だったら、モンスター避けと簡単な魔法の無効果か。うわ、気持ちわるい」

ぶつぶつ言いつつ、そんなに簡単に出来るのなら、一度試してみようかと、なにげなく自分の手を見つめて、どこを切ったらそんなに痛くないかと考えていると、ベチンとポイズンキャット姿のフレンジエスカに強烈な猫パンチをくらい、本が跳ね飛ばされた。

「……何すんだよ」

「シャーッ！」

なんかすごい威嚇された。

「恐らく、そんなことを試すのなら本なんか捨てろと言っているのではないか？ それとも、すぐ寝込む癖に馬鹿か！、か」

得物の手入れをしていたグレイが、横からぼそぼそ言った。

「それってグレイの意見？」

だいぶダメージを受け、へこみつっ問う。

「その女が言いそうなのを言ったただけだ」

「確かに言いそうだな」

フレンジエスカが満足げに頷いているところを見ると、そう遠い意見ではなさそうだ。

「まあ、俺としても、そんな馬鹿げたことを試す時間があるなら、子どもはとっとと寝ろと言いたい」

「俺は子どもじゃねえ！」

ぶんむくれ、床に落ちた本を拾う。まったく、どいつもこいつも、俺を小さいだの子どもだのチビだの言いやがって。

不満たらたらで、口を引き結んだまま、本をめくる。

「シューター、お前、暇潰しだと言ってよく本を読んでいるが、元の世界でもそうだったのか？」

「まあな。読書するのは褒められることだったし。ほんとに家事手伝いとかバイトとかで忙しく働いてる方が好きなんだけど、このなりだからな。甘んじて本を読むのでとめてる」

あとは身の回りの品の手入れとかな。ほつれた服の修繕とか、汚

れた靴を磨くとか、洗濯するとか。

「そうか。俺は文字は簡単なものしか読めないし、自分の名くらいしか書けないからな。面白いのか分からんが……」

「え？ そうなのか？」

修太は驚いた。

識字率がほぼ百パーセントの国で育っているので、文字の読み書きが出来るのが普通だと思っていたが、そういう国の方が少ないのだと思ひ出す。

「ああ」

「お金使う時に不便じゃね？ 数字も読めないのか？」

「簡単な数字ならまだ分かるが、コインは種類が一目で分かるから、数字が読めなくても困らん」

「なるほど」

言われてみれば確かに。

「飲食所のメニュー程度なら困らんが、手紙を出す時や貰った時、冒険者ギルドで依頼表を読めないのはつらいな。まあ、手紙はギルドで仲介してもらった相手に、バイト代を出して代筆してもらえし、読む時も、バイトを雇えばいいからどうとでもなるが。依頼表を読めなくても、受付でこういうのがないかと口頭で質問すればいいしな。お前のように本を読める程の者は、そう多くはない」

「ふーん？ それってつまらないな。教えようか？」

「む？」

「グレイには何だかんだと世話になってるから、文字教えるくらいなら手を貸せるよ？」

修太が善意から言うのと、グレイはやや間を置いて、頷いた。

「それは、教えてくれるのなら教えて欲しいとは思うが……。読めれば便利そうだしな」

「うん。じゃあ、明日からな」

修太がにと口元を引き上げて言うのと、グレイはぼそりと「よろしく」と言った。

どっかで恩返しをしておかないとバチが当たりそうなので、修太は機嫌良く頷き返した。

＊

迷宮都市ビルクモールの冒険者ギルドは、外観からとても大きかった。白い石造りで、四角い。市役所みたいな見た目で、中もそんな感じだ。

スイングドアになっている出入り口を通過すると、真正面に受付が見え、右手は待合室のようになっていた。テーブルや机が整然と並び、壁にはB5くらいの羊皮紙やポスターが貼られている。依頼に関することや、町のイベント情報、商店のセールといった広告まで貼られているようだ。

ダンジョンに潜るには、冒険者であることと、この町の冒険者ギルドで迷宮探索登録をしなければいけない。登録することで通行証明書を貰い、出入り口で入場料を払う仕組みだ。

ダンジョン内で得た物には税金はかからない代わりに、入場料を取っているらしい。200エナ、つまり日本円で約二千円だ。水族館の入場料みたいなもんだ。

更には、ダンジョン内で入手したアイテムの買取もしている。一回ごとに手数料を100エナ取るようだが、税金がかからないのを考えれば良心的な方だろう。

「このギルドは町役場みたいだな。アストラテのギルドみたいに、場末の酒場みたいな空気もないし」

「ここは飲酒禁止だからな。酒を飲みながら話し合いをしたい奴は、酒場に行くんだ」

修太の呟きを拾い、グレイがそう教えてくれた。

ほとんど独り言だったので、聞いていたことに驚く修太。フランジェスカは完全にスルーしているのを見ると、見掛けのとおつきにくさより、グレイの方が面倒見が良い方なんだろう。

修太は登録出来ないが、宿で待っているのもつまらないので、一緒に来た。

「俺、あっち見てる」

「ああ。勝手に外に出るなよ」

壁際の広告を読もうと修太が壁に向かうと、すかさずフランジェスカが釘をさしてきた。どうも、目を放すとすぐに誘拐されると信じてるみたいで、目を隠せだの勝手にいなくなるなだの言われる。海賊の時もジャックの時も、どっちも側に人がいたんだけどな。

修太にコウがついてきて、修太が壁際に立つと、行儀良くお座りした。

「薬屋ハッカーで、傷薬が三割オフのセール中かあ。白葉の月の30日に祭り？ 収穫祭か。へええ。フリーマーケットはいいな。えーと？ 倉庫街にてガレージセール？ 倉庫だけにな」

面白い。フリマとかガレージセールとか、こっちでもあるのか。

「あら、ボク、文字読めるの？ すごいわね。ねえ、面白いのあったらお姉さんに教えてくれない？」

ぶつぶつ呟いてたら、冒険者らしき女性に声をかけられた。二十代後半くらいか？ 左目に黒い眼帯をした、薄桃色の髪と赤目をした華やかな印象の女性だ。ベルトにダガーを二本吊っていなかったら、ただの受付のお姉さんといわれても通用しただろう。

修太は首を傾げたが、グレイがあまり文字を読める人がいないと言っていたのを思い出し、暇つぶしも兼ねて、今読んだ分をもう一度声に出して読んだ。

「あらすごい。どれも正解ね。頭良いのね、ボク。常用語もエターナル語も完璧」

女性 は文字が読めないのかと思ったら、読めるらしい。

「……どうも」

軽く会釈しておく。

「ここに用事？」

「連れが。俺は待ってるだけ」

「そうなの。ワンちゃんもお利口さんね」

女性はにつこりとコウを褒めた。コウはワンツと小さめの声で吠え、尻尾を振る。褒められて嬉しいらしい。

「お姉さんもダンジョンに潜るのか？」

修太が問うと、女性首を傾げる。

「まあときどき？　でもお姉さん、ここで働いてるからあんまり潜れないのよね」

ギルドの職員らしい。

へえと思っていると、書類を持った青年が大股に歩いてきた。

「マスター、こっちの書類を見て欲しいんだが」

二十代後半か三十代くらいの青年は、目付きが鋭くて猛者の迫力を持っていた。すらりとした体格といい、百八十センチはありそうな背といい、雑誌モデルみたいで格好良いが、見下ろされると気圧された。

「お姉さん、もしかしてギルドマスター？」

「ええ。私はベディカ・スース。〈桜火^{おうか}〉の二つ名を持ってる元冒険者よ」

「ふうん？」

すごいのかよく分からなくて、曖昧に頷く。

「こっちはレクシオン。こんな見た目だけど、非戦闘要員なのよ。」

治療師なの」

毛先だけ緑色であとは茶色いなんて不思議な髪だなと、レクシオンの髪に見とれていたら、思わぬ言葉をもらって驚いた。

「えっ」

思わず声を上げてしまう。

「すぐく強そうに見えるのに」

「それはどうも。ま、非戦闘要員ではあるけど、冒険者としても治療師としても、どっちも青ランクは持ってる。……迷子？」

レクシオンの視線が、問うようにベディカに向く。

「人待ちだって」

「へえ？ 見かけない顔だけど、誰待ち？」

「今、受付にいる二人だよ。言っとくけど、子どもでも家族でもないからな」

先手を打っておく。

「あっちの黒狼族と知り合いなのか？ マスター、彼、賊狩りですよ。賊狩りグレイで名が通ってる、紫ランクの大物。昔、一時期ここにいた、フレイニールの息子とかいう」

「へえ。それは挨拶してこなきゃね。同じ紫ランクには久しぶりに会おうし。じゃあね、ボク」

ベディカは書類を片手に、グレイやフランジエスカのいる方に歩いていった。

「少年、本当に息子じゃないの？ 雰囲気そっくりだけど」
レクシオンが遠慮なく問うのに、頷く。

「どうせ無愛想なところがそっくり、なんだろう。違うって」

「そりゃ失礼。あと、ここにいるのは構わないけど、悪戯はするなよ」

「広告を読んでもらうだけだ」

失礼な。広告はがして遊んだりしないぞ。
意外そうに片眉を跳ね上げるレクシオン。

「文字読めるの？ 書くのは？」

「どっちも出来るけど？」

「そりゃいいや。手紙の代筆のバイトがあるから、もし良かったら声かけてよ。小遣い稼ぎにいいだろう？」

レクシオンはにっと笑うと、軽く手を振って受付の方に戻っていた。

（ノリ軽いな、ここの奴）

子ども相手にバイト薦めて帰るとか。

それが普通なんだろうか？ よく分からない。

6 弟子シーク

登録をつつがなく終え、迷宮に潜る準備の為に商店を巡るという話になり、冒険者ギルドを出ようとしたところ、ちょうどギルドに入ってきた少年が、グレイを見て驚き、一瞬後にはぱあっと表情を明るくした。

白い髪に青い目をした、利発そうな少年で、肌は浅黒く、衣服は黒く、そして狼のそれに似た黒い尾を持っていた。黒狼族だ。背中に大きなバスタードソードを背負っている。

「師匠っ!？」

大声でそう叫ぶや、周りが驚いてこちらを見る中、少年はグレイに突撃をかました。

「シークか。変わらずうるさいな」

グレイに抱きつこうとしたのか、だだだと駆けてきた少年を、グレイは一步横にずれてかわす。

勢いがついていたせいで転んだ少年は、ごろごろ回転して受付のカウンターにぶつかって止まった。

一瞬、ギルド内がしーんと静まり返る。

しばらく沈黙していた少年であるが、すぐに復活した。

「ひ、ひどいです……。二年ぶりの弟子との再会なのに」

顔から激突して、鼻を赤くし、やや涙目で座り込むシーク少年。うなだれる様は子犬にしか見えない。

「その、再会時に誰にでも抱きつく癖をやめろと言っただろう。なにが挨拶はハグが普通だ。お前の親はおかしい」

グレイは冷たく言った。

「ちょっと！ お袋のこと悪く言わないで下さいよっ！」

「知るか。常識を教えん親など有害なだけだ」

グレイの返事はにべもない。

しかしまあ、シークも思い当たる節が色々あったのか、うっと黙りこんだ。だが、気を取り直したように立ち上がり、意気揚揚と近づいてくる。

「なんだ、師匠というのは？」

フランジェスカが怪訝そうに眉を寄せ、修太の気持ちも代弁して言った。

「二年前まで、四年程面倒を見ていた同胞の子どもだ。イエリが押し付けてきてな。――シーク、トリトラはどうした？ お前ら、一緒じゃなかったのか？」

「トリトラなら、三十階層をソロで潜ってるよ。師匠の言う通り、腕を磨く為にここで修行中だ。二年も潜ってるのに、まだ七十階層までしか行けてないんだけどさ」

「いいペースだな」

「全然だよっ！ だって師匠、俺らと同じ十八の時には、一人で百階層まで行ってたって言ってたじゃんか。俺らだって負けないんだ！」

ギルド内がざわついたところを鑑みるに、どうもそれはすごいことらしい。グレイの超人ぶりを見ている限り、すごい記録なんだろうなあという予想はついたが。てか、こいつ、一つ年上なのか。ガキっぽいから下に見えた。

「師匠、せっかくだから一緒に昼飯行こう。それから、いつまでここに滞在するんだ？ また稽古つけてよ！」

がんがん距離を詰めてくるシークの頭を、グレイは片手で掴むと、自身から大きく引き剥がした。

「うるさい。寄るな。鬱陶しい」

本気で鬱陶しそうだ。親犬に纏わりついて、首の後ろをくわえて放り投げられる子犬の幻覚が見えた気がした。

「俺、てつきり黒狼族の男は、皆グレイみたいに無表情なのかと思
つてた……」

修太が思わず呟くと、シークがこっちをぎらつとにらみつけた。

「誰だ、てめー！ 師匠に失礼だろ！ 師匠の顔面筋が死滅してる
のは、師匠のせいじゃないんだぞ！」

「お前の方が失礼だ」

グレイの容赦ない肘落としがシークの頭に決まる。ぎゃんと悲鳴
を上げ、床に潰れるシーク。

グレイはふんと鼻を鳴らすと、すたすたとギルドの出口に向かう。
「そのガキは放つといていい。行くぞ」

「あ、うん……」

もしかして気にしてたんだろうか。それにしても自然すぎる会話
に、よくこんなやり取りをしていたんじゃないかという気がした。

「グレイ殿、大人げないぞ……」

やや引いた様子のフランジェスカが呟くが、修太に言わせてみれ
ば、フランジェスカも普段から結構大人げないので、どっちもどっ
ちだと思う。

「し、ししよ……。もう言わないから待ってえ……」

床でぴくぴくしながら、待ってくれと懇願する声が聞こえてくる
が、“師匠”の言葉があるので無視しておいた。それに修太は騒が
しいのは好きではない。

ギルド内にいる冒険者や職員が、皆、哀れなものを見る視線をシ
ークに向けていたのは、言うまでもない。

＊

「なんなんだよ、このチビ！ 俺の師匠に馴れ馴れしくすんな！」
商店巡りの最中、復活して追いかけてきたシークは、グレイの腕
にしがみつき、犬歯を見せて修太を威嚇してきた。

馴れ馴れしくした覚えはないし、威嚇される覚えもない。

(うわ。面倒くせえ……)

修太がげんなりしたところで、 그레이が左腕を取り返し、シークの後ろ襟を掴んで道端に放り投げた。

「纏わりつくな。邪魔だ」

そうして放り投げられたシークは、綺麗に受身を取って着地した。そんなシークをちらりと一瞥し、 그레이は淡々と言う。

「シューターに喧嘩を売るな。護衛対象だ。弱いからすぐに死ぬ」

「……ハハハ」

그레이の言葉がぐっさぐっさと修太の心に突き刺さった。そういう正直さはいらないです、旦那。

「ええっ、なんで“認めて” るんですか!? 弱い奴なんでしょ!」

「強さにも色々ある。“認める” 判断基準はそれぞれだ」

「なんすか、師匠。分かりやすく言って下さいよ!」

「お前、馬鹿だ馬鹿だとは思っていたが、本当に馬鹿だな」

「ひでえ!」

ぎゃうんと吠え、シークは大きさに天を仰ぐ。

그레이の言葉には容赦が欠片もない上、毒がききまくっている。

無表情ぶりと合わさってもものすごく怖い。というか、「死んでくれ」みたいな目をしてるよ。こええええ。

内心でびくびく怯えつつ、 그레이を見ないように極力目を反らす。

「迷宮に入るには、何を揃えるのだ? 그레이殿」

殺伐した空気を一切無視して、フランジェスカが 그레이に問う。

本当に勇者だ、この女。

「野営の道具一式——これは普段から持っているな? 黒輝石を八

個、四個は予備だ。ダンジョン内での休息時には絶対に必要になる。

あとは食料や水だな。フランジェスカは魔力混合水を持っていた方がいいかもしれん」

そして、ふと思いついたように言う。

「そういえば、媒介石を水につけていると一時間くらいで魔力混合水になるんだったな。シューター、気分が悪くなるのなら、そうす

るといい」

「そうなのか？」

「私も初耳だ」

修太とフランジエスカが驚くのに、グレイは言う。

「俺も今になって思い出した。俺には必要ないが、父親がそんなことをしていたからな」

「へえ……」

どうやらフレイニールという人は魔法を使えたようだ。

「なんだよ。何でその強そうな姉ちゃんは“認めてない”のに、そのチビは“認めてる”わけ？」

何故かシークがぶんむくれている。

「名前を呼んでいるのに変わりはないのに、違いが分かるのか？」
修太はそっちに驚いた。

「“認めてる”奴とそうでない奴じゃ、名を呼ぶにしても、名の持つ力が違う！ そんなことも分からねえのかよ、チビ！」

いや、シークに比べたら確かに身長は低いが、どうしてそんなに当たられなくてはいけないのか分からない。

が、あいにくと、そういうのには啓介の側にいるせいで慣れていたので、流すのも上手い方だ。

「俺はこの風習をよく知らないから、知らないことがたくさんあるんだ。教えてくれてありがとう、シーク君」

しれっと返すと、尾を逆立てて怒り出した。

「君とか付けるな、気持ち悪い！　つか、俺の名前を呼ぶな！」

「……じゃあ、グレイの弟子一号」

「四号だ！」

え、そっち？

怒らないのにびっくりした。

「弟子四号でいいの？」

「……良くないけど、名前呼ばれるの嫌だし。うーん、うーん」

グレイが言ったように、馬鹿だこいつ。修太は、シークの馬鹿っ

ぶりを正確に理解した。

「シークでいい。俺が許可する」

グレイが言い、シークが頬を膨らませる。

「師匠のアホ！」

「目上に何だ、その口のきき方は」

グレイは容赦なくシークの額にデコピンをかました。

「ぶぎゃっ！」

すると、驚いたことに後ろに向けて吹っ飛んだ。そのまま勢いよく地面を転がるシーク。

修太も通行人も、どん引きだ。

「ちょ、やりすぎじゃ……」

「俺は弟子のしつけには手は抜かん」

怖い。怖いです、グレイさん！

「だが、もう少し手を抜いたらどうだ？ いちいち往来を転がって

いては、他の者に迷惑だろう」

それでいいのかよ、フラン！

何か突っ込みどころが違う気がしてならない。

ああ、頭痛い。

（ぐあー、啓介ー！ 頼むから早くこっちに戻ってきてくれー！）
自分一人じゃ手に負えん。

せめて役割を分散したいところである。

＊

「へっくしゅ！」

啓介は思い切りくしゃみをした。

「あれ？ こんな暑い所なのに、風邪かあ？」

ぐずぐずと鼻をすすり、井戸の水を汲むのを再開する。なかなか腕力がある仕事だが、見た目と違って筋肉もあって力も強い啓介には楽な仕事だ。あっという間に桶おけを引き上げ、井戸の横に置いてい

た別の桶に水を汲む。

「噂でもされておるのではないか？」

「お、サーシャ」

上から聞こえた声に顔を上げると、赤い瓦屋根の上に、黒いワンピース姿の少女が座っていた。紛れもなくサーシャリオンだ。

「しかし、意外に時間を取られるな」

「まあ、仕方ないよ。一人きりの孫娘が長旅に出るっていうんだからさ」

啓介は若干の良心のうずきとともに、苦笑いをした。

修太達と別れてから、今日で一週間になる。そろそろ修太達も目的地に着いた頃だろう。

アリッジャの町にはモンスターで空を飛び、一日で着いたのだが、それから困ったことになっていた。

ピアスの祖母こと“おばば”が、長旅に出るなら、しばらく売る分のアイテムを作り置きしていけどピアスに命じ、更には、啓介やサーシャリオンにも、孫娘を連れていくのだからどんな奴か見極めてやると、家事手伝いさせられているのだ。体よくこき使われているだけな気がしないでもない。

啓介やサーシャリオンは料理をほとんどしたことがないので、それ以外の家事をしていた。

おばばは小柄で可愛い霧囲気のお婆ちゃんであるが、煙管きせるを片手ににやりと笑われると、どうも迫力があつた。石占いやアイテムクリエイトを生業にしている、アリッジャでは顔役の一人らしく、誰もが丁寧に対処する人だ。それに少々おっかない。怒鳴ったりはしないが、静かな声で、サボるんじゃないよと言って去っていく。気配がなくて怖い。

啓介が膨大な魔力を有しているので、ときどき充電器代わりをさせられたりする。アイテムクリエイトというのはよく分からないが見ているだけで何となく理解して、これはこうなっているのかと訊いたら、今度は助手までさせられた。うん、藪蛇だった。

元来の賢さと器用さと人懐こさを生かし、あつという間に馴染んでしまった啓介であるが、親友のことを思い出すと心配になる。無茶をしていないといいが。

「ケイ！ ちょっと遣いに行ってきたくれんかね？」

「はい、ただいま！」

条件反射で返事をし、桶を持って台所に向かって水甕に水を満たしてから、おばばの元にすっ飛んでいく。

途中、ピアスが、ごめんねうちのおばばがと困ったような顔をするのに、いいっていいってと笑顔で返し、通り抜けていく。なんだかんだと忙しいが、ピアスとこうして顔を合わせられるだけで、なんとなく幸せな気持ちになって、嫌な気分には絶対にならないのだ。

「ケイは人がいいのだな」

屋根の上に避難し、猫のように昼寝を決め込んだサーシャリオンは、あくびを一つし、眠りにつく。

啓介ですら気付いていない気持ちには、モンスターであるサーシャリオンが気付くわけもなく、よくそんなに働けるなど感心するだけだった。

7 弟子トリトラ

「……………」

じいじい。

「……………」

もぐもぐもぐ。

「……………」

じいじいじいじい。

（なんなんだ、こいつ。うっぎ。どっか消えろっつーの）

何やら修太を目の敵にし始めたシークは、食事を修太達のいる宿の食堂で摂り始め、食事のたびに修太を睨みつけながら食べるようになった。

気にしないフリは得意であるが、三日目には大好きな食事の時間が憂鬱になり、修太はだんだん食欲を失くし始めていた。

修太とコウは宿で留守番している間、フランジェスカやグレイが下見を兼ねて昼間だけダンジョンに潜るようになった。フランジェスカは夜になるとポイズンキャットになってしまいうから、夕方には戻ってくる。

が、今日は満月なので、ダンジョン内で一泊し、明日の夕方に戻ってくるようになっていた。

つまり、この馬鹿を追い払える奴がいない。

修太はいつものようにフードを目深に被って目を隠し、もそもそと食堂で食事をし、部屋に引っ込むつもりでいた。自分の手持ちの下着を元に、慣れない裁縫をしているのだ。トランクス作りに燃えているわけである。

「あ、いた！ 探したよ、シーク。って、何やってんの。年下の子どもにガンたれて。大人げないなあ」

食堂に入ってきた黒狼族の少年が、シークを見つけて声をかけ、異様な状況に目を丸くした。

猫っ毛の短い灰色の髪と、くりくりしたブルーグレーの目が印象的な、女みtainな顔の少年だ。白い肌は透きとおるようで、生まれてきた性別を間違えたと思えない美貌の少年である。

どうも、黒狼族というのは美形揃いらしい。

目の前の馬鹿も、黙っていれば美形だ。今はただの残念な美形だ。ついでに付け足すと馬鹿。

黒色のフードがついた袖無しの上着と、黒いズボンに、茶色い革靴を身に着けた少年は、その白い腕に幾重にも包帯のような白い布を巻いており、手首から肘までを覆う、青に輝く不思議な鉄で出来た籠手こてをつけていた。華奢きゃしゃなので、やはり少女でも通用しそうだ。

年齢はシークと同じで十八歳だと思われる。腰のベルトには、皮製の小さなポシェットとダガーを一本、左側に装備し、腰の右側にサーベルを吊るしている。左利きなんだろうか。

「お帰り、トリトラ！　だってよお、こいつ、師匠に認められてて……」

「ええ！　師匠に会ったの！？」

うお。瞬間移動したぞ、こいつ！

さっきまで戸口にいたはずなのに、店の奥側のテーブルまで一足飛びでやって来たトリトラは、テーブルに両手について身を乗り出した。シークも驚いたように身を反らす。

「はいはい、食べないんなら出ておいき。食べるんならそこに座る！」

宿のおかみであるヘレンが威圧をかけ、トリトラは慌てた様子で修太の隣の席に座った。

（あああ。逃げ場を塞がれた）

急いで食べて、部屋に逃げようと思ったのに。

「シークって馬鹿だね」

話を聞いたトリトラは、昼食を食べながら、一言そう断言した。

「なんつでだよ！ 俺の話、聞いてたか！？」

ダンとフォークを持った手でテーブルを叩くシーク。皿がガチャンと鳴った。

（友達にまで馬鹿呼ばわり……）

なんだか可哀相になるが、馬鹿だから仕方がない。

自分の話を、悪口を交えてしているのを横で聞きながら、修太は黙々とスープを飲む。

「だって馬鹿だろ。師匠が“認めた”相手なんだから、弟子も尊重しなきゃ駄目じゃん」

おお。確かに、言われてみればその通りだ。

トリトラは賢いらしい。

シークもそう思ったのか、ぐっと言葉に詰まった。

トリトラはシークを無視し、修太を見て、にっこりする。人当りの良い笑みだ。

「初めまして。僕はトリトラっていうんだ。良かったら名前を教えてくださいませんか？」

「塚原修太。修太でいい」

修太はぼそりと答える。

そのことに、なんだかトリトラは感動したようだった。

「うわあ！ なんだよ、この子。師匠に雰囲気そっくり！ なんかすごいぐわってくる。僕、無愛想なの好きだよ！」

「……………」

思わず椅子ごと身を横にずらした修太は悪くないと思う。

「違う違う違う！ 同性が好きとかじゃないから！ 尊敬してる人と雰囲気似てるから、気に入ったってだけだよ？」

慌てて言い直すトリトラ。

修太はほっとして、椅子の位置を戻した。

「きっと、見た目はとっつきにくいのに、良い人だよ、この子。師

匠もそうだから。うん、よろしくね！」

ぽんと背中を叩かれたが、勢いがついていたのか、修太はテーブルに突っ伏す羽目になった。ぎりぎりで皿に当たらずに済んだが、派手な音がする。額を天板でぶつけた。痛い。

「うわっ、ごめんね！ わざとじゃなくて。ええと、ほんとごめん！」

「うわあ。弱い者苛めかよ、引くわー」

「そんなんじゃないよ、シーク！ほんとごめん。僕、力加減が下手でね」

「だったら叩こうとするなよ。迷惑な奴」

我慢出来ずに修太は悪態を返す。

つか、軽く叩いただけで相手を吹っ飛ばすとか。まじで黒狼族って規格外だな。

「ごめんごめん」

困った顔をして謝るトリトラ。良い人っぽいのが、知らずに迷惑をかける部類だな。気を付けよう。

「ごちそうさまでした。俺、先に上がるから」

手を合わせ、席を立とうとするが、トリトラに右腕を掴まれた。

「待って待って。ねえ、もうちょつとだけ話に付き合ってよ」

「……放せ」

腕を引っ張るが、うんともすんともいわない。くっ。ぴくりとも動かん！

無言での攻防に疲れた修太は、諦めて座った。給仕をしているヘレンを呼び止める。

「ヘレンさん、追加料金払うから、お茶ちょうだい」

「何が良い？」

「飲みやすそうなやつ。花の香りがしないやつを適当に選んでよ」

「分かったよ、ちよいとお待ちね」

ヘレンは笑顔で言い、去っていく。そして、ポポ茶を持ってきてくれた。味はほうじ茶に似ている。マグカップ一杯で5エナだ。

「ほんと弱いんだな、お前。トリトラ、力は弱い方なのに」

落ち着いた修太に、シークが呆れたように言った。確かに、重そうなバスタードソードを背負っていたシークだ、ぶん回せるだけの力があるのを考えれば、トリトラより腕力があるのがよく分かる。

「瞬発的な力なら、僕の方が上だけどね。小石でウサギ仕留めたりは出来るよ？」

「それはすげえ」

当たるのがまずすごい。

トリトラはにこにこしながら、楽しそうに言う。

「でもほんと可愛いな、この無愛想な感じ！ 弟に欲しいよ」

無愛想が可愛くて弟にしたい、なんて初めて言われた。ていうか、弟にしたい発言が初めてだ。

「変な奴だな、お前」

心の底から感想を口にする、ますます楽しそうにする。ずいずい身を乗り出してくる。

「ねえねえ、なんでフード被ってんの？ ここって室内なのに」

「別に俺の勝手だろ」

物珍しいのかなんなのか分からないが、フードをはごうとしてくるので、それを手で押さえる。くっ、腕がぷるぷるしてきた。

ほんと何なのこいつら。

内心で苛立ちを覚える。

「トリトラ、流石にそれはやめとけ。こいつのことは気に入らねえけど、そういうのはルール違反だ」

予想外のところから助け舟が出た。ちえーと言って、トリトラが手を離す。

「せっかくだから目を見て話したいなって思ったんだけどなあ」

「うん。じゃあ俺は戻るから」

「待って待って、ごめんってば！ もうしないから！」

今度こそ帰ろうかと思ったが、また引き止められた。ちっ。

「はー、ここの料理おいしいなあ。いっそのこと、こっちの宿に変

えちやおうかな」

「それいいな。師匠もこの宿みたいだぜ？」

「そういや、師匠は部屋にいるの？」

「いたら、こいつを一人にしてねえよ。それかもう一人の女のどっちかがついてる。護衛らしいし？」

トリトラとシークは話が盛り上がっている。

「二人とも、明日の夕方に戻ってくる。ダンジョンに潜っていない」

修太の簡潔な言葉に、トリトラは驚いたようだ。

「護衛なのに、置いてったの？」

「宿から出るなって言われてる」

「それ、守るの？」

「守らなくて痛い目を見たくない。外がおつかないのは知ってるし」
「ますます驚いたように目を丸くする。」

「随分聞き分けの良い子どもだね。六年前のシークに聞かせてやり
たい……」

「本人の前で悪口言うんじゃないよ！」

くわっと怒るシーク。

「グレイと会ったのも、海賊船でだ。とっ捕まってたところを助けてもらった」

シークとトリトラは目をパチパチと瞬いた。

「そりゃまた、意外な出会い方だな」

「いや、分かりやすいよ。相変わらず盗賊嫌いなんだね、師匠って
ば……」

そうすると、急にトリトラは修太の頭に手を伸ばした。フード越しに撫でてくる。

「ごめんね、シークが色々うるさくて。僕は味方するから」

何やら同情したらしい。

手が鬱陶しいので跳ね除けつつ、茶を飲む。

「……同情買う為に嘘ついたとか思わないんだな」

あんまりあつさり信じるので、腹の当たりがむずがゆくなった。

「嘘のにおいがしないから。君の返答には、全然嘘が紛れてない」

「そ。俺らはおいで分かるんだ。俺らに嘘ついても無駄だから、嘘つくんじゃないぞ？」

「なんで脅すんだよ、シーク」

「いてえな！ 頭叩くんじゃねえよ、馬鹿になるだろ！」

「これ以上、どう馬鹿になるっていうんだよ。馬鹿じゃないの！？」

「うるせーよ！ 黙れよ！」

ぎゃいぎゃいとやかましく喧嘩する二人。

うるさいなあと思いつつ、嘘のにおいっていうのはどんなにおいなのかを考える修太である。さっぱり分からん。

8 押しかけ訪問

結局、シークとトリトラは宿を移してきた。

「ほんとに來たのか、お前ら」

夕飯時に食堂で会ったものだから、驚いてそう言うのと、トリトラは食事しながら幸せそうに言った。

「この料理がおいしかったからさ」

「ありがとね、お客さん。うちの人も喜ぶわ」

給仕をしていたヘレンは、それを聞いて嬉しそうに笑う。料理人は旦那さんらしい。

四人がけの机にトリトラとシークが対面して座っているのを見て、修太は二人から一番離れた席に座った。やっと静かに食べられそうだった。

しばらくして、ヘレンが今日の分の夕飯を運んできてくれたので、礼を言って食べ始める。

カレー粉の味がする、炒めた鶏肉だ。美味い。付け合せの葱がまた味を引き立てている。

おいしさをかみ締めて夢中で食べていると、ふいにガタンという音がした。目の前を見ると、トリトラが前の席に座ってにこりと笑った。

「ひどいなあ。普通、ああいう場面だと一緒に食べるもんじゃない？ どうしてわざわざ一番遠い席に座るかなあ」

「何で？」

「何でって……」

「俺はお前らの友達じゃねえけど」

「……………」

うっというように言葉を詰まらせるトリトラ。

「食事の時くらい静かに食べたい。うるさいのは迷惑だ」

きついことを言っている自覚はあるが、うるさいのは嫌なのだ。

また視線を食事に戻し、黙々と食事を再開すると、またガタンと音がした。トリトラの隣にシークが座っている。シークは大げさに肩をすくめてみせた。

「可愛くねえガキ。こんな相手にするだけ無駄だってトリトラ」
「俺もそう思う。つか、そう思うんならお前も俺に関わらないでくれるか」

一番うるさくてうざったいのはシークなのだ。じと目で言う。

「ほんと可愛くねー!」

「えー? とりあえずシークよりはずっと可愛いと思うけど」

「うっせえよ、トリトラ! 可愛いって思われても嬉しくねえけどな!」

うん。修太も同じ意見だ。

「食事終わったんなら、部屋に戻れば。ここ、風呂もあるから、風呂にも入ってくればいい」

「ちよっとはお喋りしようよ」

トリトラがめげずに催促する。

「食事中」

ぴしゃりと返す。

「嫌われちゃったね……。大部分がシークのせいな気がする」

「別にいいだろ、俺は気に入わねえもんよ」

また人の目の前で悪口を言ってる。

面倒くさい。

修太はもぐもぐ野菜を食べ、スープを飲み干すと、手を合わせて「ごちそうさまでした」と呟いてから、席を立つ。

「ヘレンさん、おいしかったです」

「ありがと! いつも残さず食べてくれて嬉しいわ。いい子ね!」
ヘレンはにこつとふくよかな笑みを浮かべ、テーブルの上を片付けていく。それを横目に、自分の部屋に帰ろうと階段を上る。

「ねえ、ちょっとくらい親交を深めようよ！ ほら、お酒あるよ！」
すかさず追ってきたトリトラがどこからか酒瓶を取り出して見せた。

「俺、酒は飲まないから」

きっぱり返し、自室の鍵を開ける。そもそも子どもというなら、子どもに酒をすすめるなっつーの。ドアを閉めようとしたところで、途中でドアが止まる。

くっ。ぴくりともしない。

しかも隙間に足を入れられて、閉めるのを防がれた。性質の悪い訪問販売か、てめえっ。

「何なんだ、もう！ 鬱陶しい！」

「師匠が“認めてる”人間なんて珍しいから、興味津々なんだよっ」
ドアノブを押す修太と、片手で止めているトリトラ。後ろでシークが呆れている。

「トリトラ、あんまりすぎると犯罪だ」

「全然話聞いてくれないんだもん、つまらないよ」

あーもう。訳わかんねえ、黒狼族。

なんでこんなに気に入られてるんだ？

扉を押し返しながら、修太はちらっとコウを見た。

（狼に気に入られる要素でもあんのか、俺は……）

謎すぎる。

「グルルル」

修太が困っているのを見て、すっ飛んできたコウが、トリトラに歯を見せてうなりだす。

急に色々と面倒になった修太は、コウを止め、扉を押さえる手を緩める。

「お前、俺らに何もしないか？ 海賊とか奴隷商人の所に連れてつたりとか」

「するわけないでしょ、何言ってんの！」

華奢とはいえトリトラは百七十センチ越えくらいの身長だ。百三

十センチかそこらしか身長がない修太は、自然、見上げる形になる。そうして見上げた先で、トリトラはぎよっと狼狽した様子を見せた。

うるさいし迷惑だけど、扉の前で粘られる方が迷惑だ。近所迷惑もいいところである。

「言っておくけどね、同胞を金で売ったりするような馬鹿な真似するのは、人間くらいだよ。黒狼族や灰狼族かいろう、エルフやドワーフだってそんな真似はしないんだから」

そして、なんだか泣きそうな目をして修太を見下ろした。

「あー、もう、なんだろ。君、人間を……、いや、他人を信じてないんだね？」

そんなの、エレイスガイアで色んな厄介事に遭いだしてからだ。他人が油断ならないことと、自分が〈黒〉として特異な存在であることを理解しているからだ。

「……別に」

ぽつりと答える。

別に、信じてないわけじゃない。

啓介のことは信じているし、サーシャリオンのことも信用出来ると思っている。モンスターは誰も修太を傷つけようとは思わないのも知っているし、フランジュスカは嫌いだけど信用はしてる。ピアスは啓介が惚れてるから信用してるし、グレイは助けてくれたから気を許してるところがある。信用しているのかは今一分からない。

「よく考えれば、お前らってグレイの弟子なんだもんな。うるさくて迷惑だけど、悪い奴じゃねえか」

ぽそりと呟いて、扉を開けた。

「適当に座れば」

そして、すたすたと部屋の奥に行く。

三人分の椅子が置いてある、丸テーブルに行き、座る。苦勞して火打ち石でランプに火を点け、裁縫の続きをすることにした。

「……お邪魔します」

トリトラは律儀に言い、シークは遠慮なくずかずかと入ってきた。扉を閉める。

「ここって部屋の間取りが広いよな。俺らの二人部屋も広かったぜ？ 値段にしちやいい宿だ」

「食事もおいしいしね」

部屋を見て感想を呟くシークと、にこやかに付け足すトリトラ。修太のいるテーブルにやって来て座り、勝手に酒の用意をし始めた。修太は媒介石で作った魔力混合水をグラスに注ぐ。

修太が必死に型紙から起こして作っているトランクスを見て、トリトラは変な顔をした。

「それ、何作ってるの？ 短パン？」

「トランクスっていう下着。俺の故郷のやつ。こっちにないから仕方なく作ろうと頑張ってるよ」

ところどころ縫い目がおかしいのを見て、トリトラはますます呆れ顔になる。

「なんていうか、前衛的な縫い方だね？」

「下手って言えよ。うるせえな」

自分でも下手だと思っている。

ゴムは売ってなかったから、紐を入れるつもりだ。大丈夫、小学生の時に、ナップザックやエプロンを作る家庭科実習があったんだ。あれと同じことをすればいいだけだ。あれはミシンで手縫いではなかったが、同じ縫い方をすればいいだけのはずだ。

「ねえねえ、自分の部屋なのにやっぱりフード外さないの？」

期待たっぷりに見てくるトリトラ。

「男の顔なんか見ても面白くねえだろ」

「君かどうかはおいで分かるけど、ほら、目を見て話す方が気楽じゃん？」

「そーいや昼間もそんなこと言ってたな。」

「一つ溜息を吐き、フードを外す。」

「これでいいのか？」

やけっぱちな気分で問うと、シークとトリトラの両方が息を呑んだ。

「す、すごい……。こんな真っ黒な目の〈黒〉、初めて会った」

トリトラが哑然と眩き、シークが首をひねる。

「なんだっけ、漆黒？ 弱い上に子どもで漆黒の〈黒〉じゃ、そりゃ護衛いるわな」

急に何もかも納得したらしい。気に食わんという敵意オーラがシークから消えた。

「そりゃ他人を信用出来ないよね！ うわ、ごめんね。無理に聞き出したみたいで……」

あちゃあというように額に手を当てるトリトラ。

「別に。俺が〈黒〉なのはあんたのせいじゃねえし。これはこれで別に良いんだけど、魔力欠乏症でな、すぐに体調を崩すんだ。そっちの方が面倒」

「魔力欠乏症って何だ？」

シークが問うので、軽く説明する。

「魔力が足りなくなつて調子崩したりする体質的欠陥の病名、らしい。魔力混合水を飲んでないと、気分悪くなるし、魔法を使えば数日寝込む羽目になる。面倒だろ？」

「そんなのあるんだね。僕ら、魔法は使えないから知らないや」

トリトラはあっけらかんと言う。

黒狼族の男は、カラーズと成り得る色の目を持って生まれても、絶対に魔法を使えないのだと、そういえば前にグレイが言っていた。黒狼族の女は使えるのだというから不思議な話だ。

「カラーズなら知っていて常識だってエルフの医者言ってたけど、知らない奴の方が多いみたいだな。まあ、話だと〈黒〉がなりやすい病氣らしい」

「大変だね、〈黒〉って……。パスリル王国じゃ迫害されるし、白教の色改めの連中に捕まったら処刑対象にされちゃうし。いや、ほんと白教徒は怖いよ。僕、一回捕まってさあ。命からがら逃げ出し

たけど、ほんとギリギリだった」

予想外の言葉に、修太はまじまじとトリトラを見る。

「俺も一回とっ捕まって、モンスターの餌にされかけたけど、逆に味方につけて難を回避したな」

そいつは今、足元で丸まっている犬なのであるが。

「僕はあれだよ、ナイフ投げの的にされて死ぬ運命だったらしいけど、枷をぶっ壊して、檻もぶち破って逃げてきたんだ。しかも毒塗りナイフらしくってさあ。えげつないよね」

そんな穏やかな笑みを交えて言う内容じゃないと思う。修太は白教徒の遣り口の酷さにびびりつつ、同時に、笑い話で片付けているトリトラの神経の図太さに戦慄した。

「たまーにこの町にも出没するから気を付けてね。たいていは門前払いなんだけど、忍び込む奴もいるからさ。ダンジョン内だと、モンスターのせいに出来るからもっと危険なんだ」

「中入ったら、自己責任だもんな。ま、モンスター以外の殺害や窃盗は、ばれたらギルドから罰がいくけど」

「そうなのか？」

「そ。だから、パーティーを組む時は信用ある人としか組まないんだ。どうしてもいないなら、ソロの方がよっぽど安全ってこと」

「結構殺伐としてんのな」

「そうでもないよ？ 幾ら倒してもモンスターは湧いてくるし、何故かある宝箱の中身も、時間を置くと復活していたりするしね。よっぽどのレアアイテムでもない限り、また来ればいいっていう発想になるから。でも、パーティーメンバーで、例えば僕らだと白教徒とうっかり組んでみたりしなよ、命狙われる羽目になるだろ？ そういうのは慎重にしなきゃ拙いでしょ」

確かにその通りだ。

そこまで言うてから、トリトラはとても不思議そうな顔をした。

「ねえねえ、君ってどこの出身なの？ セーセレティーの民やミストレイン王国のエルフなんかは、黒狼族を蔑視しないけど、君も全

然差別感持ってないでしょ？　でも髪の色とかはレステファルテの民に似てるしなあ……」

「どっか遠いとこだよ。東の方。島国の出身」

嘘は言ってない。ここの世界の話ではないだけだ。

ちよつとだけ眉が寄るトリトラ。

「島国なんて、東の方にあつたかな？　まあいいや。訊かれたくないってことは分かった」

「……………」

修太はふいと目を反らし、針を持つ手に視線を据える。

嘘が分かるのといい、どうもやりにくい相手だ。

「初対面の奴の事情を、あんま根掘り葉掘り訊くのはいかなもんかと思うけど」

ぼそつと牽制の言葉を突きつける。どうも人懐こすぎて気付くとうっかり内情を話してしまうが、それは互いにとって良い事ではないだろう。

とはいえ、どこから来たの？　という話題は、会話のきっかけとしては妥当な線だ。出身地の話なら誰だって盛り上げられるから。

そして、ふと幼馴染を思い浮かべる。

（そろそろ二週間になるってのに、まだ油売ってんのか？）

修太の代わりにこいつらと遊んで欲しい。正直、疲れる。

その後は、お酒が入ってテンションが高くなった二人に、しきりに故郷や師匠の自慢話や、ダンジョンの話をされ、延々と付き合わされた。

朝まで話に付き合わせて、元氣ピンピンで自室に戻っていった二人を見て、まじで半端ないぜこいつらと、体力の違いをむぎむぎと突きつけられた。すっかりくたびれ果て、昼まで寝てしまった。生活のリズムが早起き早寝の健康志向な修太にしては、かなり珍しい日になった。

*

「――酒臭い」

扉を開けるなり、フランジェスカは盛大にしかめ面をした。フランジェスカとグレイは、夕方ではなく昼頃に帰ってきた。寝ぼけ眼で目をこすりつつ、修太はあくびする。

「……俺は飲んでない。シークとトリトラに付き合わされて、朝まで話聞いてただけ。……眠いから寝る」

眠さのあまり、やや拙い話し方になりつつ、修太はふらふらとベッドに戻ろうとする。

「あいつら……。とっ捕まえて、説教せねば」

グレイが低くうなるように言うのに、足を止める。おおっと、鬼が降臨されたぞっと。

「そんな怒らなくていいよ。お陰で、この辺の常識とか聞けたし。……とりあえず寝る」

「待たんか」

白い麻の長袖とズボンという寝巻姿の、後ろ襟をフランジェスカが引っ掴む。ぐえっと声を漏らす。息が詰まる。

「ケイ殿達と再会した。部屋を変えるから、荷物を纏めろ。それから、いい加減に起きろ。もう日は頭上高いぞ」

「そうなのか？」

寝起きは良い方だが、今日は寝不足なせいで、目が今にも閉じそうになっている。腹は空いたが、食欲より睡眠欲を優先したかった。ちらりと窓を見ると、確かに日射がさんと降り注いでいるし、締め切った部屋はむっとする程暑い。

「こんな部屋で寝ている方が体調を崩す。せめて窓くらい開けないか」

「ふああ」

「聞いているのか、クソガキ」

フランジェスカの怒声が低く響く。

「聞こえてるよ……。着替えて部屋を移動すればいいんだろ？ で

も男女別にしてもこの部屋でいいじゃん」

「わざわざ隣り部屋にしてくれたんだ。まあ、確かに、長い滞在になるから男女別にはなったがな」

「ほっか……」

またあくびをし、修太はふらふらとベッドまで行くと、上掛けの上に適当に置いていた服をその場で着替え出す。ピアスならともかく、フランジェスカの前なのと、眠たさから遠慮がない。

着替えるや、荷物を旅人の指輪に放り込む。すぐに移動の準備は出来た。

「珍しい！ シュウが昼間に眠そうにしてるって。俺、初めて見たかも」

久しぶりに再会した幼馴染は、黙々と昼食を摂る修太の前で、目を瞠みはった。珍しい珍しいと、ぼんやりしている修太の額を指でつつん突いてくるので、流石にイラッときて、手をはたき落とす。

「うざい」

啓介は両手をホールドアップした。

「調子に乗りました。すみません！」

ふん。修太は鼻を鳴らし、また食事を口に運ぶ。食事しながらだんだん目が覚めてきたような気がする。

「 그레이の弟子で、シック君とトリトラ君だっけ？ いいな、俺も会ってみたい！」

「会えば。 그레이の説教が終わった後にも」

部屋を移した後、弟子二人の所に歩いていったから、怒られているはずだ。別にいいと言ったのだが、しつけの一環だと言われれば、修太もそれ以上は言えなかった。

「眠そうにしてると外見の歳相応に見えるわよ、シューター君」
ピアスが相変わらぬ眩しい笑顔で、楽しそうに言った。

「……………」

無言を返すと、面白くなさそうに肩をすくめる。

「ほんとに眠いのね」

「それでも食事だけはしっかり食べておところが、シューターらしいの」

修太の隣りに座ったダークエルフの少女姿のサーシャリオンは、ふふっと口元を引き上げた。

四人掛けのテーブルばかりなので、隣りのテーブルにフランジェスカが一人で座っている。

そこに、遅れてやって来た 그레이 が向かい側に腰を下ろした。反省しているらしき二人の黒狼族の少年もまた、空いている席に座った。フランジェスカの眉が一瞬ぴくりと動いたが、特に文句は言わない。

「シューター、迷惑ならこいつらを部屋に入れなくて良かったんだ」
그레이 がぼそりと言った。

「ああ、うん。性質の悪い訪問販売みたいなのに、ドア閉める前に足で止められたりしたし、面倒臭くなっただけ……」

그레이 を振り返りつつ、眠気からぼそぼそと返す。トリトラの顔から血の気が引くが、眠い修太は失言に気付かない。

「ほお。どっちだ？」

「トリトラの方だけど？」

「説教追加だ、トリトラ」

「うわああ、すみませんでした、師匠！ もうしませんから！」

「聞かん。賢く見えてそそっかしいからな、お前は」

ぴしゃりと返す 그레이。トリトラは絶望したようにテーブルに突っ伏す。

おお。性質をきちんと理解しているようだ。

「貴様、面倒だからとそれをいつもするんじゃないぞ」

フランジェスカが小言を言うので、修太はぼーっとフランジェスカの後ろ頭を見て、首をひねる。

「いつもするわけねえだろ。そいつら、うるさくて迷惑だけど、グ

レイの弟子だから悪い奴じゃねえと思っただけだし」

何を不思議なことを言うんだ、こいつ。というように、さも当然と返す修太。

「……ふん」

何でかグレイが小さく鼻を鳴らし、視線を反らした。

「？」

よく分からないが、話が終わったようなので、自分のテーブルを向いて食事を再開する。

「……なに」

視線が気になって顔を上げると、啓介とピアスが微笑ましいものを見る目を修太に向けていた。

ピアスがにまにまして言う。

「いやあ、やっぱり良い人だね。シューター君」

「？ 良い人ってのは、ケイやピアスのことだろ。俺はそういうんじゃないやねえ」

おかしなことを笑顔で言う。少し心配になった。

「なに、そんなにアリッジャの方は大変だったわけ？」

おかしなことを言い出すくらい大変だったのかと思って問う。

「うーん。なんか気に入くわないっていうか、失礼っていうか……」

「まあまあピアス、落ち着いて」

急にむくれだしたピアスは、いつものように可愛らしく見えるが、いったいどうしたことだろう。

とりあえず食事したら寝よう。修太はうとうとしながら、寝ることしか考えていなかった。

8 押しかけ訪問（後書き）

第十二話、終了。

覚えてなくてもいい設定。

黒狼族が美形揃いなのは、ハーフの法則を用いてるだけです。
親が不細工でも、ハーフだと子どもは美形になるとかいう都市伝説的なあれです。

黒狼族は、黒狼族の女性が産んだ子でないと黒狼族にならないという不思議な法則があります。

黒狼族の男と人間の女の間の子は、必ず人間になる、みたいな感じですよ。

何故そうなるのか。ファンタジーだから（オイ

第十三話 真実は白日の下に… 1 旧知との再会

ダンジョンへの入口からほど近い、町の奥まった場所にそこはあった。

四角に切られた白い石が、乾いた大地に幾つも並び、石のところどころに苔やカビが生え、蔦が絡みついている。

共同墓地であるにしては手入れが雑であったが、熱帯雨林が多いこの地方では、手入れをしてもすぐに草が生えてくるから、自然とこんな状況になってしまう。

グレイはそのうちの一つの墓の前に来ると、手にしていた酒瓶のコルク栓を開け、中身を墓に振りかける。琥珀色の酒が白い石を濡らし、暑さですぐに干上がった。草いきれと酒のにおいがむっと立ち昇る。

——偉大なる冒険者の一人、フレイニール・コルビッツ、ここに安らかに眠る。精霊の祝福があらんことを。

苔むした石には、セーセレティー精霊国での弔いの言葉が刻まれているのを、文字に明るくないグレイも知っていた。葬式の時に周囲の人間に教えてもらったのだ。

レステファアルテ人であるフレイニールにしてみれば、残念ながらそのような文句であるが、それでいてセーセレティー精霊国の方がうまが合うとよくぼやいていたのを思い出すと、これはこれで良いのかもしれないと思う。

黒狼族として育ったグレイには、墓参りをするという考え自体が不思議なものであったが、人間はそうするのだと父親たるフレイニールが言っていたのを思い出して、何となく足が向いたのだった。

黒狼族は、死者は荒野に埋めて、ただそれだけだ。死者は大地にかえり、自然の中にその魂が宿るから常に側にいるのと変わりはない、その為に悲しむ必要はないとされていた。

こんな石ころの下に、父親の死体が埋まっている。ただの墓標だ。死ねば魂は肉から解き放たれて天に逝くのだから、やはり死体が埋まっているその場所を拝むのがよく分からない。

けれど、なんとなくそこに在りし日の彼がいるような気がして、無意識に言葉を紡いでいた。

「――決着^{けり}をつけにきた。十五年も待たせて悪かったな。……親父」見たくなって、目を反らしていた。信じていたものを粉々にされて、その粉々にした相手を見なくなかった。

グレイは逃げたのだ。見たくなかった暗闇から。

煙草に火をつけ、青空の下で煙を吐く。

心は異様な程に凜^{はく}いでいた。

いつか戻るつもりだった。それに向き合い、正面から戦う為に。そのいつかが、ついに来たのだ。

もう、あの頃のような右も左も分からぬ子どもではない。

戦う力も身に着けた。

「真実を、白日^{はくじつ}の下に^{もと}」

グレイはぽつりと呟いて、来た時と同じように、静かにその場を立ち去った。

煙草から出る煙が、青い空に白い線を引き、やがて揺らいで消えた。

＊

「レクシオンさん、書き方、これでいい？」

便箋^{びんせん}を冒険者ギルド職員であるレクシオンに見せると、レクシオンは頷いた。

「うん、その書き方でいいよ。その調子でね。分からなくなったら

また訊いて」

「はい。ありがとう」

修太は礼を言い、前の席に座っている男を見上げる。

「オーケー貰えたから、封をしますね。他に書きたいことや入れたい物はありませんか？」

「いや、無いよ。それで宜しく」

「はい。あ、こっちに住所を書くんで、先に教えて貰っていいですか？」

「ああ、送り先は――……」

他のメンバーが迷宮に潜っている間、修太は冒険者ギルドで手紙代筆のバイトをしていた。宿にいるより人の目がある分、安全だからと、特に反対もなく、つつがなくバイトしている。

どうしてバイトしているかって？ 暇だからに決まってる。

一通り仕事を済ませると、代筆希望の男は感心気味に笑った。

「小さいのに賢いね、君」

小さいという言葉に怒るべきか、そんなことないですよと謙遜するべきか一瞬悩み、結局修太は「どうも」とぼそりと呟いて会釈した。

ともかくとして仕事は終わったので、レクシオンの姿を探して声をかける。

「こっちの仕事、終わりました」

「ありがとう、助かるよ。今日はもう代筆希望者いないから、帰ってもいいよ。仲間を待ってるならそうしててもいいし、また書庫に行く？」

「いえ。今日はゼフ爺ちゃんと約束あるから、そっちに行きます」
修太が、ギルド職員でもある菓草園の管理人の名を口に出すと、レクシオンは僅かに目を瞠った。

「え？ ゼフさんと仲良いの？」

「書庫に行く途中で挨拶したら、話しかけられて。そのまま夕方まで話してたんだ。面白い人だよ」

「……すごいな。ゼフさん、話長いから苦手なんだよね」
「そう？」

老人の話なら喜んで付き合う修太は、長話について迷惑に思ったことはない。首を傾げる。

「今日は薬草の手入れを手伝うことになってるから。もう行くよ」

「おう。頑張ってるな」

レクシオンの応援を背に聞きながら、修太はギルドの本舎を出て、庭に出ると、薬草園の方へと駆けていった。白い髪と白い髭をした、優しい青の目をした老人を探しに。

そして、その帰り、本舎に戻る修太をゼフが見送りについてきて、一緒に本舎に入ったところで、修太は大剣を背負った中年の男が、受付で興奮気味に話しているのを見つけた。

「グレイが戻ってきたって、本当か!？」

思いがけず、旅の仲間の名前が出て、修太は驚いた。

こげ茶色の髪を後ろで一つに束ねた、無精ひげが目立つ男だ。茶色い目をしているのを見ると、ノン・カラーのようである。

「坊^{ぼん}」

ゼフ爺さんに声をかけられ、ハッと意識を引き戻す。

「ここまででいいな? 明日も来るか？」

「明日は来ないよ。仲間は、三日潜って一日休むらしいんだ」

「ペース配分が出来ているのは実に賢いな。じゃあ明後日来るか？」

「来るよ。手伝う」

「ありがとよ。年寄りにはしんどい仕事もあるからな。うちの者が、菓子を焼いてくれるらしいから、昼は薬草園に来いよ」

「まじで! ありがと、ゼフ爺ちゃん! リファカさんにも宜しく言っというて」

修太にとっては暇つぶしなので少し気が引けないこともないが、菓子と聞いているテンションも上がるというものである。

「ふおふお。任せておけ」

ゼフはフードの上から修太の頭をぐしゃぐしゃに掻き回すと、ゆったりした足取りで薬草園の方に戻っていった。かくしゃくとした老人だが、動作はのんびりしている人だ。結構気難しい人らしいので、修太が仲良くしているのをギルドの職員にはよく驚かれる。

やっぱり老人というのはいいいもんだと修太は感動をこめてゼフの後姿を見送る。小さい頃にはすでに祖父母は他界していていなかった。祖父母というものに憧れがあって仕方が無い。

待合室のようなスペースに行き、空いているテーブルを探してきよろきよろしていると、周りで話し合いをしている冒険者の中で、ここ最近で顔見知りになった人と目が合った。

「よっ、少年！ 今日暇そうだね！」

赤い髪に緑のバンドをした十八くらいの少女が、片手を挙げて挨拶した。緑色の目は翡翠みたいに明るい。ヒルダという名で、へ緑の弓士だ。

その向かい側で、ヒルダのパートナーであり恋人でもあるエア青年が穏やかな笑みを浮かべた。金髪青目の治療師兼剣士^{ヒーラー}だ。一応、治療師の方が本業らしいが、剣士として引っぱり回されているという隠れ苦労人だ。二十代くらいに見える、なかなか格好良い顔をしているのに、何故かいつも分厚いゴーグルをしていた。周りの噂によれば、ヒルダの暴虐的な風の魔法から目を守る為という話があるが、本当かは知らない。

「まあ確かに暇だけどさ……」

口の中でぼやきつつ、聞きたいことがあったので、ヒルダの方へ歩いていく。

「なあヒルダさん、あの受付の人って誰？」

「受付く？　ありゃレクシオン君じゃないの。受付で一番不人気青年。受付嬢の方が癒されるからって避けられる不幸な青年」

散々な評価をされているらしきことは分かった。どんまい、レクシオンさん。

「いや、そっちじゃなくて、お客さんの方……」

エアがヒルダに代わって答える。

「あの人、ザードさんだよ。ここじゃ古株の冒険者で、まあ顔役みたいなもんかな？　ギルドと揉め事あると、仲裁に来てくれたりする、顔の広い人だよ」

「へえ……」

ザード。確か、前に雑貨屋の店主が話していた名前だ。

「どったの、少年。何か気になることもあった？」

「いや。グレイの名前を出してたから、知り合いなのかと思ってさ」

「ああ、なーる。そういやあんた、賊狩りの旦那に護衛されてる規格外だったわね」

「……規格外？」

初耳だ。フードの下で、目を丸くする。

「そ。だって賊狩りグレイって言ったら、盗賊しか相手にしない冒険者で有名だもんよ。そんな奴がよ、なんでかあんたみたいな子どものこと認めてて、護衛までしてるっていうんだから驚きじゃないの」

「弟子がいるのも驚いたけどねえ。パーティー登録はしてないとはいえ、ソロでいるので有名だから、団体行動してる時点で充分に驚きだよな」

エアがしみじみと頷いた。

修太はふとグレイの言動を思い出す。

「ああ、そういや護衛は苦手だって言ってたな……」

「へえ！　苦手なもんもあるのね！」

「はは。ヒルダだって護衛は苦手だろ？　雇い主の上から目線がムカつくから無理だって、よく言ってたじゃないか」

「子どもの護衛だって苦手よ。目を放すとちよろちよろするし、我が儘だし、すぐに泣くじゃない。その点、この落ち着いた少年を見なよ。すごく護衛しやすそうよね」

これは褒められてるんだろうか。それとも子どもらしくなさを言

及されてるんだろうか。よく分からん。

ヒルダから視線を外し、受付の方を見ると、ザーダは話を聞き終え、待つ為かこちらのテーブルにやって来て、空いている席に座った。

「教えてあげたんだから、少年も何かお得な広告あったらお姉さんに教えてちょうだい」

キランと目を光らせ、ヒルダが言う。

「私はまた文字を教えて欲しいな。さあさあ、こっちおいで」

エアがにこやかに隣の席を示す。

もしかして、聞いた相手が間違っていたのだろうか。

修太は少しげんなりし、ヒルダの頼み通り広告を見て、得になりそうな情報を教え、エアとは、エアが勉強に使っている絵本の解読を一緒にした。

絵本があつたら教えやすいんだけど言ったら、速攻買ってきたのだから驚いた。暇つぶしで文字を教えてくれるような物好きは滅多といないので、この機に習得するつもりなんだそうだ。

とても飲み込みの早い、良い生徒である。

ヒルダはエア任せだが、自分の名前を書けるようになると、そのことを大いに喜んでいた。

余談だが、医師や薬師は文字を読めないと仕事にならないが、治療師は魔法で傷を癒すので、文字を読めなくても仕事になるんだとか。医療関係にも色々あるらしい。

＊

啓介達が帰ってくると、ギルド内が色めきたった。

ギルドの女性職員や女性冒険者の色めいた視線が啓介や青年姿のサーシャリオンに向けられ、若手の男性冒険者などは友好的に挨拶をする。

代わりに、フランジエスカとピアスには、女性からは嫉妬めいた

視線が向けられた。グレイは怖がられているのか誰もガンつけない。

ええ、いつもの人たらしの才能を発揮して、セーセレティーでは不細工扱いのはずなのに格好良いと言われているんですね、うちの幼馴染殿。

ただ挨拶してるだけで女性職員が頬を赤らめ、迷宮内でピンチに陥っていた冒険者を率先して助けていたせいで、女性冒険者に将来有望の眼差しを向けられ、男性冒険者には是非ともパーティーを組みたい相手に昇格したらしい。というのが、この状況にげっそり来て、思わずフランジエスカに訊いた時の回答だった。

「ワフワフツ」

出入り口から弾丸のように駆けてきたコウが、修太の元にやって来て、足元に纏わりついてきた。ぶんぶん尻尾を振り、何やらくわえていたものを修太の膝に落とす。ピンク色の石——ローズクォーツという天然石に見える。親指大だ。

ギルドにいる間は邪魔なので、コウには啓介達についていくように言っていたのだ。サーシャリオンが側にいるから、闇堕ちさえしていなければ、威圧感で目が冴えるだろうと踏んでのことだ。

「あら、結構大きい媒介石じゃないの」

身を乗り出したヒルダが、目を丸くして言った。

修太の膝に手をかけたコウは、ぶんぶん尻尾を振っている。褒めて褒めてと言ってるみたいだ。

「はいはい。偉い偉い」

仕方ないので、頭をわしわし撫でてやると、ようやく落ち着きを取り戻し、足元に寝そべった。

「はー、ほんとによく懐いてるね、この犬」

「ほんとだよな。何かしたわけでもないのに、これだよ」

土産を持ってくるとか、どんだけ賢いんだよ。

修太は感心を混ぜた呆れの目で、足元のコウを見る。まあ、モンスターなんだけどさ、こいつ。

「グレイ！」

お。ザーダが動いた。

修太は成り行きを見守るべく、視線をグレイに向けた。

ザーダは身長こそ百七十センチ無いくらい低めではあったが、がたいは良かった。がっしりした肩幅をしていて、丸太みたいな筋肉のついた腕をしてる。見て一目で分かる重量級だ。

そんな巨体をどしどしいわせ、グレイに近づく。

気のせいかな、一瞬、グレイの眉が不愉快そうに寄った気がした。ほとんど表情が読めない男が、不愉快そうにしているのが一目で分かるくらいの感情を表わすのは初めて見た。

「生きてたか、良かった！ 十五年ぶりか？ 久しぶりだな！ まますフレイニールに似てきやがって。はは、表情以外だけだな！」

「……ああ、久しぶりだ」

グレイの薄っぺらい声が、静かに返した。その声を聞いた瞬間、遠く離れて聞いているはずの修太の背筋がゾクツとした。あまりにも感情がこもっていなかったのだ。

しかしザーダという男は違和感には気付かなかったのか、笑顔でまくしたてる。

「お前、あの後、いきなり町を出ていっちゃもうからさ。心配したんだぜ？ すぐ帰ってくると思って、商店のあちこちについて声をかけてまわってたくらいだ」

「……十五年も続けてたそうだな。普通は諦めないか？」

やはり、どこか不機嫌そうな声だ。

「ダチのガキのことだぜ？ 簡単に諦められっかよ」

がははと歯を見せて笑うザーダは、はたから見るととても面倒見の良い、良い人のように見える。

だが、どうもグレイの機嫌は徐々に低下しているようだ。

威圧感が普段の五倍くらいありそうで、側に行くのも嫌な感じだ。

怖い。

何であのザーダという男は気付かないんだろう。

「どうだ？ 久しぶりに会ったんだ。酒でもよ。ヨーエやエルザにも声をかけてくるぜ？」

「――いや、断る。疲れていてな、そんな気分ではない」

ぱっさりすっぱり断るグレイ。

ザーダは残念そうに肩を下げる。

「そうか。まあ、何かあれば声をかけてくれよ。じゃあ、俺はお暇するわ」

「……ああ」

あまりしつこくしても嫌われるだけだと思ったのか、ザーダはあつさり身を引いて、ギルドを出て行った。

（疲れた？ 疲れたって言ったか、今。嘘だろ、嘘。分かりやすっ）未だかつて、グレイが疲れたなどと口にしたのを聞いたことはない。戦慄を覚えていると、ヒルダが上体をかがめ、口元に手を当てて密やかに声をかけてきた。

「ねえ、ちょっと少年」

「なに？」

「あれ、絶対嘘よね？ しかもなんかすごい怒ってたような気がするんだけど……」

「ザーダさん、全然気付いてなかったけどね」

エアも声を潜めて言う。

「いや、嘘だろ。それに怒ってるだろ、どう聞いても」

「変なの。フレイニールさんと親しくしてた友人のはずだけどね、ザーダさん。父親の友人には、もっと親しくするもんじゃないのかな？」

「俺に聞かれても困るんだけど……」

修太は眉尻を下げ、困ったような声で返す。

三人は困惑いっぱい顔を見合わせ、即座に深く関わるのはやめておこうと意見が合致した。興味本位で首を突っ込んだら、火傷を

負うどころか細切れにされそうな気がしたので。

第十三話 真実は白日の下に… 1 旧知との再会（後書き）

フレイニールは、亡くなった後でもこの町では有名な人でいるくらい、ハイレベルな冒険者。先輩が若手に必ず話す人だから。っていうのをどこかに書かんといかんと思ってます。はい。

なんだかんだで知り合い増えてく修太。

お荷物で置いてかれてるだけだけど、ある意味、一番、情報収集をしているかもしれない。

2 離脱宣言

「今日で迷宮に潜り始めて一週間になるわけだが、どんな感じだ？」
修太の簡潔な問いに、啓介はフォークに刺した揚げ物を口に運ぶのをやめ、うーんと首を傾げた。

「四十階層まで行ったけど、これ以上は日帰りは厳しそうだな。慣れた道をダッシュで通過しても厳しかった。五層ごとに一層直通的の脱出ポートがあるからいいけどな。はは、ほんと、ダンジョンもののゲームみたいだよ、ここ」

そして、途中で宝石オブジェクトを拾い、七色集めて、途中のレリーフにはめたらレアアイテムが入った宝箱が見つかることだとか、うっかり落とし穴にはまって下の層に進んだりとか、食虫植物と追いかけてこして面白かったとか（追いかけたのは啓介の方らしい。んなアホな）。まあ、出てくる出てくる。変な話のオンパレードだ。「あと、ゴブリンの群れに襲われた時は笑っちゃったなあ。小さいおっさんがぞろぞろ来るんだぜ？　もう、お腹痛くて死にそうだった」

くすくす笑う啓介。

そんなところで笑い死には間抜けすぎるからやめとけよ。

ふうと息をつき、ピアスが思い出した様子で憤然と言う。

「そうよ、もう。小さいおっさん、小さいおっさんうるさいから、私まで笑えてきちゃって」

「緊張感がないって、ピアスに肘鉄食らっちゃった」

へへへ。打撃を受けたはずなのに、どこか嬉しそうに笑う啓介。
うん、あれだな、恋は盲目ってやつだ。分かりやすい。

「我は何が笑えるのか未だに分からんのだがな」

大皿にのった山盛りのステーキを着実に減らしつつ、青年姿のサ

ーシャリオンが、短い黒髪を揺らして不思議そうに言う。モンスタ
ーの癖して食事のマナーも習得済みらしく、優雅にすら見える食器
使いだ。でも食べるのは速い。

「フランとグレイは？」

「グレイは笑わなかったけど、フランさんは、倒し終わった後に発
作が出たみたいだったよ？」

「ケイ殿、言わなくていい！」

後ろの席にいたフランジェスカが、すかさず振り向いて抗議した。
「まあ小さいおっさんのことはいいとして、じゃあ泊り込みで行く
のか？」

「そうだね。二百階層に早いところ着かないといけないし。百階層ま
では割りと楽しいんだけど、そこから難易度が増すらしいから、
とりあえずは百階層突破が目標かな」

「ケイ殿は、不意打ちさえなければ大丈夫だろう。ピラス殿は戦闘
力は若干不安だが……、トラップの解除が得意なのでありがたい存
在ともいえる。まあ、サーシャがいるのだから、どうとでもなるだ
ろうな」

フランジェスカが冷静に評価し、ピラスも同意した。

「む。しかし派手に魔法を使えぬからな、ちと厄介だ。本気を出す
と、ダンジョンが消し飛ぶやもしれぬしな」

しれっとサーシャリオンが問題発言をした。

「いっそのこと、全部氷漬けにした方が楽なのだがなあ。別の人間
も巻き込んでしまうし……」

「うん。やめとこうな、サーシャ」

修太は口を出し、サーシャリオンがこれ以上、暴走しないように
止めた。

戦闘力については不安はないのだが、別の意味で不安になってく
るメンツである。

＊

「それにしても、シューター君で黒狼族と仲良いわよね。気が合うのかしら」

夕食後、啓介が照明代わりに光の魔法を使ってくれたので、その光の下で、約束を守ってグレイに文字教習をしていた修太は、きょとんと目を瞬いた。そりゃあ、師匠がするなら自分達もとシークやトリトラまで押しかけてきて、不思議なことになってはいるが……。

「たまたまじゃないか？」

うん、たまたまだと思う。

「えー？　だって、黒狼族って個を尊ぶでしょう？　大勢というのって好まないって聞いたことあるんだけど。違うの？」

勇敢にも、ピアスは正々堂々グレイに問うた。

てゆか、ピアス。暇だからって男性陣の部屋にたむろしてんなよ。しかもちゃっかり横に椅子持ってきて、一緒に勉強とか……。

風呂上りなのか花の甘い香りがして落ち着かない修太である。出来ることなら出てって欲しいくらいだ。異性として気がなくても、ドキッとするには充分である。何せ極上がつく美少女っぷりなのだから。

「その通りだ。師匠と弟子や、仲の良い者がペアを組んでいることもあるが、それ以外はあまり群れたりはせん。まあ、集落にいる時は別だが」

そうだな。エンラやリンレイも二人で行動していたし、目の前のシークやトリトラもそうだ。まあ、会った黒狼族の絶対数が少ないので、参考にしていいのかは不明だが。

「そーいや、灰狼族？　とかいうのって、まだ会ったことないけど。そっちはどうなんだ？」

「あれ？　ギルドにいたけど見なかった？　狼が立って歩いてるみたいな人達。あの人達は、種族としては結束が固いけど、どっちかというと、一生仕えるに値する相手を探して旅してるから、一人が多いかな？　主人を持つ人なら大勢でいることもあるけど」

ピアスが首を僅かに傾げ、考えながら言った。

狼が二足歩行？ 見た覚えはない。

「見てねえな。ふーん、探してみるよ。あと会ってないのはドワーフかな？」

「ドワーフなら、鍛冶屋に行けばいつでも会えるよ？ 今度ナイフ研ぎに行く時、一緒に連れてってあげよっか？」

「その時は啓介も一緒に頼む。たぶん、はしゃぎまくってうるさいけど」

そう答えたところで、ちょうど扉を開けて入ってきた啓介が、面白そうににやりとした。

「ええ？ 何、俺の悪口？」

「ちげーよ、ドワーフの話」

「今度、鍛冶屋に一緒に行こうって話よ」
すかさずピアスも口を出す。

「行く行く！ 俺の剣も手入れに出さないといけないし、明日にでも行こう。予備の武器も見ておきたいし。――あれ？ 皆で勉強会？」

テーブルに固まっている光景に、啓介は目を丸くする。

「まあな。文字の教習所だ」

「俺も教えよっか？」

「んじゃそっち座れ。お前、教えるの下手だけど、文字くらいならいけるだろ」

修太が言うと、トリトラが意外そうな顔をした。

「彼、教えるの下手なの？ なんでもさらっとこなしてそうだけど」
「トリトラ、天才っていうのは、凡人がどうして出来ないのかが分からないんだよ。何でも当たり前に出来るから。あれだ。どうやって呼吸してるのか？ って訊くようなもんだ。改めて言われるとよく分からねえだろ？ というわけで、俺はこいつのノートは当てにしていたけど、こいつから教わるのは諦めてた。だってよ、こうなっ
てこうなるからこうなるんだけど？ とか言われても分からねえだ

ろ」

「勉強ってのはなんかややこしいんだな？」

シークが不思議そうに言った。

四人掛けのテーブルだが、シークやトリトラが椅子を持ってきたので、まだ一席余っている。啓介は残っている席に座ると、それぞれの手元を覗き込んだ。

「って、そうよ。黒狼族と仲良いよねって話だったのに、だいぶ反れちゃったじゃない」

ピアスがぷうと頬を膨らませて、軽くにらんできた。そんな仕草をしても可愛いって何事。

まあ修太は可愛いとか綺麗とか思うだけで、啓介みたいに惚れたりはしていないが。

ピアスの問いには、トリトラがやや興奮気味に答える。

「この子、迷惑そうにしている割に、話は聞いてくれてるからさ。話やすいんだよね。だってシークの支離滅裂な話も聞いてるんだよ！？」

「……それはすごい」

「ひでえ！ トリトラも師匠もひでえ！」

ぎゃんと吠えるシーク。うん、うるさい。

修太はトリトラの意見に全面的に同意する。

「確かにそいつの話は、飛んだり跳ねたり分かりにくいことこの上なかったな。馬鹿だということだけは分かった」

「お前もなにげにひでえこと言ってるじゃねえよ！」

テーブルを叩き、シークが吠える。

「いやあ、小さいのに賢いよねえ。ねえ、もういつそ僕の弟になればいいよ！」

トリトラがやたら目をキラキラさせて言うのに、にがっという顔で返せば、残念そうに肩を落とした。

「あーあ。振られちゃった。やっぱシークのせいだと思うんだよね」
「待て。今の会話のどこに俺のせいになるところがあったよ！？」

理不尽な話に、シークが眉をピクつかせている。

「うるせーぞ、お前ら。あと、その文字、間違ってる。そこは丸じゃなくて、こう」

常用語は、アルファベットののような感じの文字で、それを組み合わせる。まず文字の一覧を羊皮紙に書き出して、別紙に身の回りの単語を中心に書いて、教科書代わりにした。

それで、今しているのは、まずは文字一覧の書き取りである。自分で持っていれば、いつでも練習出来るからだ。

「これ終わったら、絵本でも読むか。書店に行くかな……」

元々、簡単な文字は読めるグレイはすぐに飲み込んだし、シークやトリトラは文字はさっぱりだったらしいが、若さのせいかな飲み込みが早い。

「お前らも明日、一緒に来いよ。店の看板とか、そういうのを読むと覚えやすいからな」

英単語は、店の看板や道路標識の案内板を見ていると読みやすかった。修太は経験からそう言った。身近な物に書かれている内容が分かれると面白く感じるものだ。

「行く行く！」

「もちろん行くぞ！」

トリトラの方が飲み込みが良い分、負けず嫌いなシークもやる気満々だ。

「なんか……見た目の歳はこっちが上なのに、シューター君の方がお兄さんに見えるのは気のせいかしら。やっぱ近所のお兄さんに見える気がする」

目をこしこしこすりつつ、ピアスが疑うように言う。

「大丈夫だよ、ピアス。俺にもそう見えるから」

啓介が笑い交じりに言う。

……おい、横で好き勝手言ってるじゃねえぞ、そこ。

そんなわけで、翌日は買い物をして回ることになった。

羊皮紙とペンを持参し、鍛冶屋に行けば、そのトンカチの絵の下に書かれた鍛冶屋の文字を教え、書店に行けば、やはり看板に描かれた本の絵の下に書かれた文字を教える。絵と一緒に書くように言うのと、シークやトリトラは面白がっていた。絵を描くということをしたことがなかったらしい。

不思議な光景に、通行人達は奇異の目を向けてきたが、修太は教えるからには手を抜く気はなかったので、それを一切無視した。

ドワーフに会えたのは感動した。身長が百十センチくらいで大人なんだそう。体は小さいのに、力が強いらしく、筋肉がすごかった。まるで丸太みたいだった。欧米とかにいそうなムキムキで、ムキムキ度が高い人ほど顔もごつかった。でも、不思議と女性のドワーフはスマートな顔立ちをしていた。見かけからしても腕に筋肉はなさそうなのに、ハンマーを振り回していたからすごい。

鍛冶屋でエルフや灰狼族を見かけた。エルフはどこか浮世離れした美しさを持ち、目は冷たい印象があった。たいていは人間嫌いらしいから、仕方ないそう。灰狼族は、二メートルくらいある灰色の狼が二足歩行していた。ちゃんと服も着ているが、靴は履いていなかった。ふかふかしている尻尾に目が釘付けになってしまい、ものすごく引張ってみたい衝動に駆られたが耐えた。そんなことをしたらぶん殴られそうな気がしたので。

灰狼族は、バスタードソードや巨大なモーニングスターや斧を使い、切るといふより叩き切るような戦法が得意らしく、身長にあいまってでかい武器を持っているから、よく出入り口に引っかかって戸口を破壊するとかで、店を壊されて怒るドワーフのおっさんと盛大に口喧嘩していたのが印象的だった。

店を巡った後、昼ご飯は宿ではなく他の飲食所で摂り、その時にもメニューの読み方で単語を教え、実際に料理が運んできて食べることで印象付けさせた。普段は店員に肉料理を適当にとかで頼んでいるらしい。

「黒狼族って、集落で文字教えたりしねえの？」

根本的な疑問を口にする、分らなかったのか、シークやトリトラは首を傾げてグレイを見つめた。淡々とグレイが答える。

「族長一家やそこに近い者は文字を扱えるらしいが、その他の者は生活に使わないから気にしたこともないだろう。俺も、外に出るまで文字がどういふものかは知らなかったからな。父親が簡単に教えてくれるまで、意味が分からなかった」

「やっぱ閉鎖的だとななるのかね？俺らの故郷は、教育を受けさせる義務っていうのがあって、七歳から十五歳までは絶対に学校に通わなくちゃいけないから、たいていの奴は読み書き出来るんだ」
修太がオムライスもどきを食べながら言うと、シークが行儀悪くスプーンの先を修太に向けた。

「だからお前、弱いんだよ！俺らはひたすら武術の稽古だもんな。しかも男は成人したら“外”に出なきゃいけないから、そりゃもう必死だったぜ」

「ええ？それじゃあケイが強いのと釣り合わないじゃない」

ピアスが突っ込みを入れる。うぐと押し黙るシーク。修太はしれっと答えを言う。

「啓介の家は金持ちでさ、護身術として剣術を習ってたから強いんだ」

「最初はそうだったんだけど、途中から面白くなったんだよ。俺、身体動かすの好きだし。あとは、いつか宇宙人と喧嘩しても勝って親交を深められるようになってね！」

啓介は素晴らしい笑顔で電波なことを言った。

（やっぱこいつ、残念な美形だ……）

可哀想なものを見る目を修太は啓介に向ける。だいたい、喧嘩すれば親交が深まるなど、少年漫画の中だけの話だろうに。普通は陰悪になって終わりだ。

「う、うちゅう？なに？」

トリトラが目を瞬き、聞き返す。

「あー、いいよ。こつちの話。……自重しとけ、アホ」

「うぐぐ」

右隣に座る啓介の左脇に、肘を入れる。腹を押さえて突っ伏す啓介。

「食事中だが、話しておくことがあつてな。いいか？」

ふいに 그레이 が静かな声で話を切り出した。

皆、きよとんと 그레이 を見る。話しかけられて返事することはあつても、 그레이 から話しかけてくることは結構珍しかったのだ。

「一週間だが、もう迷宮に慣れただろう？ 俺は別行動をとるから、次からはお前達だけで潜れ」

「……また急だな」

フォークを皿の上に置き、フランジェスカがちらりと一瞥して言う。

「そうでもない。言わなかっただけで、慣れたら離れるつもりだった。やたらお前達と会うからこの町に戻ることを決めただけで、迷宮に潜る為に来たわけではないからな。四十層まで行けたんだ、もう充分だと判断した」

それがすごいことなのか修太には判別が付かないが、 그레이 から見ると充分に慣れたと判断出来ることなんだろう。

「師匠、まさかもうこの町を離れるんですか？」

恐る恐る問うシーク。

「――いや。しばらくはいる」

呟くように答えるけれど、それ以上は語る気はないようだった。

急な離脱宣言に、サーシャリオンを除いた皆は戸惑っていたが、啓介が能天気に戻した。

「うん、いいんじゃないかな。 그레이 の好きにすればいいよ。ここまで付き合ってくれただけ、すごく助かった。ありがとうございました」

ぺこっと頭を下げる啓介。それで、場に和やかな空気が流れる。

「そうね。確かに、とても助かったわ。ありがとう」

「ダンジョンには不慣れの身、協力感謝する」

ピアスが笑顔で礼を言えば、フランジェスカも堅苦しく礼を言う。サーシャリオンはマイペースに食事をつづ、「まあ、面白かったぞ」と、よく分からないことを言った。

「宿はどうするんだ？」

移動するのかわからない意味で問う。

「他にすることがあるだけだから、そのままにしていればいいのなら、そうしておこうと思うが」

問うようにじつと見てくるので、修太は周りを見た。

「俺は別に構わねえけど？」

「男部屋のことは男で決めろ」

フランジェスカが簡潔に言った。ピアスも頷いている。

「我はどうでもいい」

サーシャリオンはいつも通り放任主義を貫くようだ。啓介を見る。「俺も構わないよ。アドバイス求めることあるかもしれないけど、それでも良ければ」

にこっと人好きのする笑みを浮かべる啓介。対する 그레이 は感情の见えない顔で、顎を引いた。

「ああ。俺がアドバイス出来るのは、せいぜい百十階層までだが」

「充分だよ」

話は纏まった。

食事が終わると、宣言通り、 그레이 はふらりと姿を消した。

3 暗躍

「シークに、トリトラか。……待ってたのか？」

その夜、宿のすぐ側まで来た所で、グレイは弟子二人に声をかけた。見た所、人の姿はないが、グレイは気配とにおいを感じとっていた。

それを証拠に、宿と隣家との間の小道から、弟子二人が闇から溶け出るようにして現れた。待ち伏せしていたらしい。

「ええ、まあ」

「何か協力出来ることがあったらしますよ？ 師匠」

弟子二人を見つめるグレイ。

「何の話だ？」

「とぼけないで下さいよ。師匠ってば、俺らといた四年の間で、この町の名前を出すだけで機嫌が悪くなっていたでしょう？ この町に、何かあるんですね？」

トリトラが青灰色の目に真剣な光をたたえ、グレイを真っ直ぐに射抜く。

「師匠が町なんか執着しないのは知ってますから、たぶん、親父さんのことだと思うんですけどね」

後ろ頭を腕で支えるようにしながら、シークもまた、何うようにグレイを見ていた。

グレイは通りを素早く見回し、人目がないのを確認すると、弟子二人の方に歩いていく。

「……ついてこい。ここは話するには相応しくない」

「「はい！」」

場所を人けのない倉庫街に変え、壁にもたれかかって話す。

「確かに、お前達の考え通りだ。俺は禍根を断ちに来た。だが、お

前らにそれを協力してもらおう気はない」

暗闇の中、グレイの琥珀色の双眸は、暗く光った。睨まれた二人は、すくみ上がって背筋を正す。

「だから、余計な世話をやいて嗅ぎ回ったりするなよ？ 約束出来ないなら、しばらく動けないようにする」

グレイは武器は持たず素手であったが、それでもシークやトリトラが二人がかりでかかってでもボコボコに出来る実力がある。それを二人は知っているの、本気を悟って、ぶるると震えあがった。

「しません！ 何もしません！」

「探る真似もしません！」

「「約束します！」」

青ざめて声を揃える。

ふ。グレイの薄い唇から、笑いのような吐息が漏れる。

「――分かった」

しかし、満足げなグレイに、シークは恐々と問う。

「ええと、でも、師匠。よく分からないですけど、危ない橋を渡るんなら、あのチビ達とは宿は別にした方がいいんじゃないですか？」

「ああ、俺もそれは考えたが……。今、一人になると、狙われる確率が上がりそうだから。あいつらを利用していうようで気に入らんが、せっかくだからこの流れを維持することにした」

シークとトリトラは顔を見合わせる。

「おい。今、そんな大物相手なのかと考えたりしただろう？ さっきの約束を思い出せ」

「はぐっ、すいません、師匠！」

「今のは不可抗力だと思います！ でも、すみません！」
素直な二人は即座に頭を下げた。

「お前らにこの件で協力してもらおう気はないが、あいつらに危険が及ばないかだけ気を付けてやっててくれ」

グレイの付け足した言葉に、弟子二人はぱあっと表情を明るくする。師匠を手伝えるのが嬉しいらしい。

「分かりました！ 特に、あのチビと、銀髪の女が危険そうっすね。気を付けときます」

「あの〈白〉も少し不安ですけどね。女剣士とダークエルフは問題無いですね。あの子のことは特に気を付けますよ。子どもですし、魔法を使えても〈黒〉では身を守るには不十分でしょう」

「……よろしく頼む。報酬も出す」

グレイの言葉に、弟子二人はぶんぶんと首を振った。

「いえ！ 金はいらないです！」

「代わりにまた稽古つけて下さい！」

目をキラキラさせるシークとトリトラを一瞥し、グレイは短く息を吐く。

「……分かった。暇な時にでも、稽古をつけてやる」

「やった！」

「ありがとうございます！」

どうしてそんなに稽古を付けて欲しいのか、グレイにはいまいち分からない感覚だったが、ひとまず懸念が解消されたので、あとは好きに動けると思った。

話が済んだので、宿に戻るべく歩きだす。

（花ガメの花粉さえ出てこなければどうとでもなるが……。あれに弱いことを話したことがあるからな……）

ちらりと考え、少し憂鬱になった。

本当に、あれだけはどうしても苦手だ。

＊

ギルドで攻略情報や注意すべき情報が入っていないか聞いてから、ダンジョンに入る。それが賢いダンジョン攻略の方法なんだそうだな。なんでも、ダンジョン内は、日ごとにモンスターの出現数や道が少しずつ違うらしい。だから、ダンジョンから出た後、ギルドでアイテムを買い取りしてもらう時などに、口頭で情報提供を求められる。

話すだけだから楽だ。百層を越えると別室で聞かれるようになるらしい。

ダンジョンに潜る冒険者のほとんどの者は、五十層より上の浅い層でアイテム稼ぎをして生計を立てているそうだが、中には、攻略に命をかけている者もいる為、一定区画より上については情報を秘匿にしているらしい。

その秘匿分の情報は、ギルドが高値で売っているとか。情報提供に関してはダンジョン探索者の義務になるらしく、怠りすぎるとダンジョンへの入場禁止という罰則がある。ギルド運営するだけの金をどこから捻出しているのかと思えば、そういうところかららしい。取得物の買い取り手数料と入場料がいるだけで、取得物に税金はかからないから、それで大金が手に入るならと非協力的な者もほとんどおらず、平和的に解決している。

（ダンジョンっていうのは、町の財産であり、国の財産っていうのが面白いよな……）

鉱山みたいな扱いなのが、異世界らしくて面白い。

（ギルド職員さんも冒険者の人達も、みんな親切で過ごしやすくていいな）

旅が終わったら、こういう所で働くのも悪くないかもしれない。そう考える啓介は、まさかその善意が主に自分だけに集中しているのには気付いていない。

今、情報を教えてくれている受付の女性がにこにこ愛想が良いのも、ギルドに来るなり挨拶してくれる冒険者達がにこやかなのも、そんなものなんだろうと思っていた。

「なあ、君達、グレイとパーティー組んでる冒険者だって聞いたんだが……」

受付で話していると、おずおずと声をかけられた。

ひとまず受付の女性に礼を言い、受付から離れてそちらに向き直る。

「パーティーは組んでませんよ。彼なら、俺らがもう慣れただろう

っていうことで、別行動になりました」

「あ、そうなのか……」

困ったように息を吐く男。三十代くらいの、ひょろりとした男だ。細い目は山吹色をしていて、肌は白い。髪が銀髪なのを見ると、セーレティーの民なのかもしれない。冒険者にしては、町人のようなシャツとズボン姿だ。白金色の不思議な色をした細い腕輪が、質が良いだけに少しだけ浮いている。

「失礼だが、あなたは？」

フランジェスカが慇懃に問う。

「あ、すみません。僕はヨーエ・イリッツ。彼の父親と友人で……。帰ってくるなんて思わなかったから驚いて。とりあえず来てみたんですが、いないんじゃないですか……」

聞けば、話を聞いてすぐに、仕事を奥さんに任せて出てきたのだそう。

「エルザも会ったって言ってたんだけどなあ……」

「エルザさんって、ここの治療師の？」

ダンジョンでこしらえた切り傷を治療してもらったことを思い出して、啓介は問う。

「そう、それ。彼女と、ザーダっていう男と、俺の三人で昔は固定パーティーを組んでいたんだ。たまにフレイとも組んでいたんだよ。グレイと顔見知りなのもそういう事情があってなんだが……」

それで会いたかったらしい。

「宿は一緒のままなので、もし良かったら言付けしておきましょうか？」

啓介が善意から問うと、何故かヨーエは慌てた調子で断った。

「あ、いや。いいんだ。見かけたら声をかけることにするよ。今からダンジョンに行くんだろう？ それだと悪いから」

「いえ、待機組がいるんで。ほら、あそこで手紙の代筆してる奴です。伝言があるならあいつに言って下さい」

啓介が指差した先では、修太が冒険者の女性とテーブルを挟んで

座り、手紙を書いていた。その足元にはコウが寝そべっている。満足げに寝そべって、ときどき耳をピクつかせている。一度、修太を残してコウをダンジョンに連れていったが、帰りたがってそわそわしていたので、連れていけないことにしたのだ。幾ら犬姿をとっているモンスターといえど、側にいる者がそうだとこっちも落ち着かないので。

「えーと、どっち？ あの女性？」

「いえ、その隣りのテーブルの、黒フードの方」

「ああ、分かった。じゃあ、もし伝言する時は頼むことにするよ。ありがとう。……では、どたばたして申し訳ないけど、もう帰るよ。急ぎの用事を思い出したから」

「あ、はい……」

慌ただしく帰っていくヨーエの後姿を見送りつつ、啓介は忙しい人だと首を僅かに傾ける。そして、こちらが名乗り忘れていたのを感じ出し、少しバツが悪くなった。自己紹介はコミュニケーションの基本だ。

自分の不作法さに少し落ち込みつつ、用事も済んだのでダンジョンに向かう。

「じゃあ、がんばろっか」

「ああ」

「うん！ いい素材が仕入れられるといいなあ」

「我はお弁当とやらが楽しみだ」

口々に言い合いながら、ギルドを出る。

今回は三泊してくる予定だ。フランジェスカはサーシャリオンが側にいれば、とりあえず闇堕ちの危険はないようだからと踏んでのことだ。修太を残していくのは不安だが、コウもいるし、どうになるだろう。

どこまで潜れるか楽しみである。

4 修太の暇潰し

「よっ、暇してんのな」

「シーク……」

ガタンと音がして、本から顔を上げて見つけた顔に、修太は反射的に顔をしかめた。

「お前、その反応、めっちゃくちゃ失礼」

「……お前、うるさいから」

理由を簡潔に述べ、また視線を本に落とす。ここの歴史はなかなか面白い。

文面に視線を固定しつつ、ぼそりと問う。

「なんかボロボロじゃね？ ダンジョン、そんなにきつかったのか？」

シークの白い髪や黒い服のあちこちに砂埃がついている上に、額は腫^はれ、手にも包帯を巻いている。

「ちげーよ。昼間に師匠に稽古つけて貰って、それでな」

「相変わらず容赦や加減の文字がないよね、師匠……」

またガタンという音がして、シークの隣りにトリトラが座った。

「投げ飛ばされて、近くの水路に突っ込むわ、畑に穴あけるわ。分かってたけど、あちこち打ち身だらけだ」

「うん。分かってたけどね、こうなるの。師匠も、稽古付けてって頼んだら不思議そうにしてたし」

「二年経ったんだから、少しくらいまともにやりあえるかと思ったんだけどなあ」

「間合いに入ったら、気付いた時には吹っ飛ばされてるもんねえ。動作が見えないってどういうこと」

溜息混じりに言い合う二人。グレイの戦闘センスは流石らしい。

まあ、それくらいなくては、砂漠の悪魔なんて大蛇を一人で相手したりしないだろう。砂漠での旅を思い出し、修太は、勝負を挑む勇気がある少年二人の無謀さを思った。

しばらくぼやいていたが、トリトラがどこからか羊皮紙と羽ペンとインク壺を取り出した。前も酒瓶を取り出していたのを不思議に思っ問うと、腰に引っかけているポーチの中に、紐で繋がっている小さな保存袋を百ばかり折りたたんで入れていると教えてくれた。ポーチ内に手を突っ込んで、紐を丸ごと掴んで、取り出したい物を想像すれば出てくるようだ。

見せて貰うと、小指くらいの小さな袋に、赤い糸で魔法陣が刺繍されていて、それが麻紐で幾つも縛られていた。前にピアスが言っていた、冒険者は持っているのが基本という道具だ。値は張るが便利が良いので、トリトラやシークは金が貯まる度に買っていたらしい。セーセレティー精霊国の冒険者ギルドなら、どこでも売っているとのことだ。

「ねえねえ、暇なら文字教えてよ。文字。ほら、絵本もあるよ」

今日は仲間は誰も帰って来ないから、読書して夕飯時にでも帰ろうかと思っていたのに、これだ。基本的に待合室のテーブルは、冒険者や修太みたいに帰りを待つ人が使う物らしいが、修太がバイトを始めたので、隅っこなら自由に使っていると大人達は言ってくれていた。急に代筆のバイトが入った時に呼べるから便利らしい。たぶん、こっちの意見の方を優先してるんだと思う。

「おい、見てみるよ。ほら、これだけ書けるようになったんだぞ！」
シークも羊皮紙を取り出して、目の前でさらさらと覚えた文字を書きだした。本、インク、紙、ギルド、朝、夜、おはよう、お姫様、王子様。統一性の無い単語が並ぶ。最後の単語は、たぶん、絵本から覚えたんだろう。

とはいえ、まだまだである。

「私も混ぜて欲しいな」

気付けば、エアが遠慮なく隣りの席に座ってきた。

「あたし、横で軽く食べてるわね。頑張って学びなさいよ、エア」
ヒルダが偉そうに言い、エアの隣りに座って骨付き肉をかじりだした。美味そうだ。

見ていたら、お腹がぐうと音を立てた。

「う……」

つい顔を赤くしてうつむくと、それを見たヒルダがきやらきやら笑いだす。

「正直ね、少年！」

「ふふ。私の分だけどあげるよ、シューター君」

「食べ物で釣るなんて卑怯だよっ！ 分かった、じゃあ僕はお茶を買ってきてあげる」

対抗心を燃やしたらしきトリトラが、ギルドを出て行き、すぐに木の実のカップを手にして戻って来た。ギルド前にある飲食店からテイクアウトしてきたらしい。

この辺りは、中身は食べられないけれど柔らかく、皮が固い赤い実になるアーシェルクというカッコイイ名前の木が多く生えている。荒野でも育つらしく、テイクアウト用のコップやスープ皿代わりによく使われているのだ。実の中身自体は、ケケケテ鳥の餌になるんだそうだ。ケケケテ鳥は、ケケケテと鳴く真っ黒い羽毛の鳥だ。七面鳥くらいの大きさがあり、この辺で出る鳥肉料理は主にケケケテ鳥だ。レストファルテで隊商の馬車を曳いていたクルクルといい、なんともネーミングセンスが安直である。……分かりやすくいいけど。

そして、ヒルダが持っている骨付き肉もまた、ケケケテ鳥のハーブ焼きである。

「……いただきます」

お腹が空いていたので、遠慮なく貰うことにした。

両手を合わせて呟き、紙袋入りの肉を食べる。茶はポポ茶だ。

「それって何？ お祈り？」

エアが不思議そうに問うのに、口の中の物を飲み込んでから答え

る。

「俺の故郷の、食事の時の礼儀みたいなもん。食べる前に、食べ物とそれを作ってくれた人に感謝をこめて言うんだ。で、食べ終わると、ごちそうさまって言う。宗教ではないけど、これしないと何か気持ち悪いから」

「へえ、良い風習だね。ここいらじゃ、食前の祈りで、地の精霊と水の精霊に感謝するんだけど、私やヒルダは精霊信仰はしてないからね、特に何もしないかな」

「人それぞれ、好きにすればいいと思う。宗教だってそうだ。信じたいものを信じればいいと思う。ただ、信仰を押し付けるのは良くないから、それさえ気を付けておけばいいかな」

修太が淡々と返すと、ヒルダがシニカルに口元をひん曲げて笑った。

「へえ、信仰の押し付けか……。はは、今の言葉、白教徒の連中に是非聞かせてやりたいね」

「俺の故郷は、八百万の神様がいるって考えをしててさ。何にでも宿ってるんだ。だから、漠然とした宗教感はあるんだけど、違う土地の宗教を良いところだけ混ぜこぜにしたりしてて、なんか信仰心に薄いんだよね。無信仰ってわけではないと思うんだけどさ。だから俺、一つの神様を盲目的に信仰するっていうのがよく分からないんだよな」

その感覚だけは、未だによく分からない。

でも、なんとなく漠然と、神様みたいな大きな存在はいるんだろうなという気がしている程度。

エレイスガイアの創造主であるオルファールンには直に会ったので、いないとは言わないが。

「ちっさいのに小難しいこと考えてんのねえ。そんなんだと、若ハゲになるわよ？ 少年」

「げほっ」

ちよっ、食べてる最中に背中を叩くな！

「……失礼なこと言わないで下さいよ、ヒルダさん」

咳き込みつつ、茶を飲んで、焼き鳥を食べ終わると両手を合わせ
て「ごちそうさま」と呟いた。屑を捨てるついでに井戸で手を洗い、
戻ってきたら、ここ最近でお定まりになってきた文字教習を始める。
年上相手でもやりづらいところもあるが、元々遠慮なく物を言うところがあるので、気にしない三人は助かる。

一通り文字を教え、夕飯時になったのでヒルダやエア、ギルド職員に挨拶して宿に帰る。シークやトリトラに挨拶しなかったのは、宿が同じだから一緒に帰ると言うからだ。

道を歩く修太の横に、パタパタと尻尾を振りながら、コウが歩いている。

(こいつ、疲れないのか……?)

いつ見ても、ぶんぶん尻尾を振ってテンションが高い。

「お前さ、いつもフード被ってて疲れねえの?　つか、もう暗い
しいいんじゃないか?」

確かに、シークの言う通り、周囲は薄闇に包まれている。後ろ頭を腕で支えるようにしながら、飄々と歩いているシークを、修太は見上げる。

「パスリル王国の辺境じゃ被ってないと危なかったし、レステファルテじゃ、被ってたけどちよつとした拍子にばれて海賊に誘拐されちまった。その後、官船で魔物避けしたら、第三王子に目えつけられて、危うくあの王子の魔物避けにされちまうとこだったし。これだけで面倒事を避けられるんならそうする」

修太の返事に、シークは絶句したように固まった。

「おまつ、もしかして、パスリル王国から逃げてきたのか?」

「正確には、クラ森からこっちに来たんだ」

「クラ森?」

今度はトリトラが訊いてきた。

「青空^{エターナル・ブルー}永久地帯の真下にある森」

まあ別に嘘ついても困る内容じゃないしな。修太はあっさり答える。

「東の島国が故郷って言ってなかった？」

「うん。気付いたら啓介とそこにいた。で、フランに殺されかけたけど仲間になって、その後、サーシャに会って、で、レステファルテでピラスとグレイとコウに会ったんだ」

「ちよっ、待て待て待て！ 今、さらって言ったけど、なにげに中身がすごくねえか！？」 特にあの女剣士の名前当たり！」

「馬鹿だな、シークってば。気付いたら魔の森なんかにいた方がおかしいでしょ！」

「うん。でも、いたんだから仕方ねえじゃん。ま、色々あって、不思議現象を探して旅してるんだ。フランとは和解してるから平気。今は護衛についてくれてる。俺とは仲悪いけど、ケイとは仲良いから問題ない」

腹が立つだけで問題は無い。腹が立つだけだ。…………。

「小さいのに……やけに大人びてると思ったら……」

トリトラの声が不憫そうな響きを持つ。

「帰らねえの？ 人間って家族に固執^{こしゅう}すんだろ。遠い所から来てんなら、親が心配するんじゃない？」

シークがある意味最もな質問をした。

「それは大丈夫だ。俺の親はどっちも死んでる。一年前に事故でな」直後、ドコッという音がした。

振り返ると、路面にシークが顔面から潰れていた。

「ああ、ごめんね。うちの馬鹿が」

トリトラが爽やかな笑みを浮かべ、地面に沈めたシークの背をぐりぐりと踏みつける。

とりあえず修太は見なかったことにした。笑顔が怖い。

「でも啓介の家は健在だからな。もう帰れないし、悪いよな……。当の本人が、不思議現象に喜んでるからまだいいけどさ」

「帰らないんじゃないの？」

「なんか、扉が開くのが三百年後らしくってさ。俺は人間だから無理だな」

「？　なんか複雑な条件があるわけ？」

「まあな」

嘘は言っていないので、トリトラは不思議そうに首をひねりつつも頷いた。

「二人は帰らないのか？　マエサマに」

「え？　帰らないよ？」

更に不思議そうに言われた。何で帰るのか分からないといった風情で。

「一回くらい、顔見せに帰ってやれば？」

「何でそんなめんどくさいことしなきゃいけないんだよ。どうせ追い返されるんだから、帰る必要ないと思うけど」

なるほど。帰る場所がなくても気にしない、グレイタイプらしい。

「ねえ、シーク？」

「ああ、そうだな。この野郎っ」

「げふっ」

シークは肯定しつつ、回し蹴りをトリトラに放つ。トリトラは油断していたのか、もろに腹に一撃をくらい、路地裏まで吹っ飛ばされた。バキャン！　という、何かが割れる音が響いた。

「ふうふう、ざまあみろ！」

鼻息荒く、シークが言い放つ。

「お前ら、俺の後ろで派手に喧嘩するのやめてくれない？」

つい言ってしまった修太は悪くないと思うんだが、どうだろうか。

4 修太の暇潰し（後書き）

見ていると痛いですが、二人の喧嘩はじゃれあいレベルだったりします。

それから、二人とも特に何か考えてるわけではなく、疑問に思ったことをただ口に出してるだけです。答えたくなければ相手が断るからいいだろう程度にしか考えてません。

5 厄介事の予感

三日ぶりに会って気付いたのだが、何だかあの黒狼族の少年二人——特にトリトラの方が異様に修太に懐いている気がする。

珍しいこともあるものだ。

いつも無愛想で、思ったことをはっきり言うタイプだからか、友達がいっても少人数で、あとは敬遠しがちだ。だが少し親しくなれば修太の良いところが分かるのか、随分友好的になる。

なんとなく友達をとられた気がして、少しだけでもわっとしてしまいが、啓介はまじまじと三人を観察してみた。

（うーん、シュウはあんま友達いなかったし、いいことなんだろうなあ）

どちらも性格は悪くなさそうだし、悪意には敏感な修太が迷惑そうにしつつも追い払う真似はしていないので、大丈夫そうである。

だが……

「なんだろう。友達じゃなくて、保父と幼稚園児に見えるなあ……」
思わず口からぼろりと感想が漏れる。

もちろん、保父が修太で、幼稚園児がシークとトリトラだ。見た目の年齢はシークやトリトラの方が上なのに、落ち着いていて世を遠巻きに見ているような修太は同年代に比べてずっと老成して見えて——それでも実年齢は十七歳なのだが——修太の方がお兄さんに見える。

たぶん、シークやトリトラが子どもっぽいんだろう。二人は何かあるとすぐに喧嘩しては、喧嘩なのかと疑問に思うような激しいバトルを繰り広げ、またけろっと仲直りしている。暴れるとすつきりするタイプらしい。それでいて周りを巻き込まないように、場所を選んでいる辺りがすごい。外であれを見た啓介は驚いたものだ。し

かし、啓介達が不在の三日でそれに慣れたらしく、呆れた様子でそれを眺めているのだから修太もすごい。

二人は迷宮探索で日々の糧^{かて}を得ているようだが、グレイと再会してから日は帰りでしか潜っていないみたいだ。それでも、一度潜れば一週間くらい余裕で暮らせる金は手に入る。それでも、武器の調整代で額が半分くらいに減ってしまうが。

「……そんな気がしてくるから言うな」

聞こえていたらしく、修太はにがっという風に顔をしかめた。自室で読んでいた本をパソコンと閉じる。

「ホフとヨウチエンジって何だ？」

言葉から褒め言葉ではないと思ったらしきシークが、じと目で問うてくる。

「なんでもねーよ。……おかえり、啓介、サーシャ。フラン、どうだった？」

満月以外で側を離れたことがないせいか、修太はフランジェスカのことを気にしていたようで、挨拶してから真っ先にそれを訊いてきた。部屋は別だが、ポイズンキャットでいる間、フランジェスカは修太の側にいることが多い。寝る時も、満月の日以外は修太のベッドの足元に丸まって寝ていて、朝日が出て人間の姿に戻ると、むくっと起き上がって女部屋の方に帰っていく。〈白〉である啓介が、一度、ポイズンキャット時に毒素^{クイース}を浄化して部屋を分けてみたが、毒素が漂っているといい食べてしまうらしく、落ち着かないようですぐにこっちに帰って来たのだ。一瞬、意識が闇に吞まれてしまうのだとか。よく分からない感覚だが、フランジェスカには大事らしい。

かと言って、サーシャリオンを女部屋に行かせればいいのかというと、男女どっちにも化けられるとはいえ、なんだか微妙だ。主にピアスと同じ部屋にさせていいのかという面において。フランジェスカは警戒しつつも気にしない気がする。まあ、本人も、啓介や修太がいる部屋の方がいいと希望するから、男部屋にいてもらっ

る。

「私の側にいる分は平気なようだったぞ。ダンジョンは人死にが出るから、毒素も多い方だな。我はおいしく食べてきた。腹はいっぱいだが、人間の料理は美味いから夕飯は食べるぞ」

「そういや、お前もモンスターだったな……。食べてたのか」

サーシャリオンの返答に、修太がうろんな顔をした。

「うむ。呼吸するのと同時に喰らうから、傍目にはそうは見えんだろうな。毒素溜まりはケイに浄化させているし、環境もマシになるのではないか？」

「そうなのだ。何かというと浄化してみろと練習させられていた。

啓介は薄らと微笑を浮かべる。

「モンスター？」

「え？ そいつのにおいがモンスターみたいなのって、モンスター退治する冒険者ならよくあることだと思ってたけど、違かったのか？」

「うっかりしていた。」

「そういえば、この二人は知らないのだった。」

「ああ、我は神竜サーシャリオンⅡクロイツェフ。暇潰しにこやつらの旅に付き合っている。ちなみに、そこなる犬もモンスターだぞ？
アイアンウルフ
本性は鉄狼だ」

「「はあ!？」」

二人は声を上げ、手にしていた羽ペンを放り出し、修太の足元で満足げに寝そべって尻尾をときどきパタッと動かしているコウを見た。

「いや、こいつも冒険者の側にいるからモンスターのにおいがするんじゃないの!？　つか何、あんた、竜って……。えええ」

シークが盛大に混乱している。

「白教徒にとっ捕まった時に、モンスターの餌にされかけたつつ

たろ？ こいつがその時のモンスターな。闇堕ちしてるのを助けたら懐かれた。本当はでかいんだが、でかいから連れていけないって言ったら、なんか小さくなったんだよな。意味わかんねえだろ」

修太がさらっと横から言った。

「僕らも意味わかんないよ。〈黒〉だからってモンスター従えてんの、初めて見たよ？」

トリトラは目を白黒させている。

「俺、〈黒〉には一人会った程度だから、他は知らねえ」

修太がそう答えた時、シークとトリトラが唐突に椅子を鳴らして立ち上がった。びっくりする啓介の前で、扉がノックされる。「入るぞ」というグレイの声に、なるほどと思いながらどうぞと答える。

「師匠！ お帰り！」

「お帰りなさい、師匠！」

扉越しでもグレイと分かるとは、やはりにおいで分かるのだろうか。啓介は感動すら覚え、グレイを見る。グレイは無言で二人を見て、ぼそりと低めでかすれ気味の、しかし良い声で言う。

「……お前らの部屋は、ここじゃなかったはずだがな」

大人で強くて格好良くて、しかも声も良いなんて羨ましい限りだ。修太が聞いたら「お前にだけは言われたくねーよ、その台詞」と言いそうなことを、啓介は頭の中で呟く。

「すみません！ 退散します！」

「わざとじゃないです、たまたまです！」

言外に、迷惑をかけるんじゃないとっとと部屋に帰れと言われた弟子二人は、急いで荷物を纏めると、慌ただしく部屋を出て行った。

「あの二人って、友達っていうより兄弟みたいだなあ」

啓介の言葉に、グレイは自分のベッドの方に向かいながら答える。「幼馴染らしいし、家も隣だったそうだからな。そんなものだろう」へえ、俺達みたいなものかと、つい修太を見たが、修太はすでに本を開き直して視線を文面に据えていた。

「グレイ、そなた、煙草と酒と香水のにおいが物凄いいぞ」

すれ違い様においがしたが、鼻の良いサーシャリオンには拷問のようなものだったらしい。しかめ面で苦言を口にする。

「酒場に行っていたからな。俺にもきついから、風呂に行ってくる」
ベッド脇のトランクを開けて着替えを引っ張り出すと、グレイは即座に扉に向かう。

「あ、待って、グレイ。ヨーエって人がギルドまで訪ねてきてたよ？ シュウは何か伝言聞いた？」

「いや」

「そ。まあそういうことだから、一応、言っておくな」

啓介の言葉に、グレイは口を閉じて、思案するように足元を見た。
「……あいつもか。ふん」

何か気に食わなさそうに鼻を鳴らし、啓介に短く礼を告げてから、部屋を出て行った。

静かに閉まる扉を見つめ、啓介は目を瞬く。

「あれ？　なんで怒ったんだろ。俺、何か悪いこと言った？」

修太やサーシャリオンを振り返ると、サーシャリオンは窓際の紐に引っかけて干していたタオルを手に取りながら言う。

「なにやら、父親の友人が気に食わないようだな。何があったか知らんが、ふふ、厄介事の香りがするな」

にやにやと楽しそうに笑みを浮かべていて、それに修太が嫌そうに突っ込む。

「サーシャが言い出すと、本気で嫌な予感がしてくるからやめろ」

まあ、修太がそう言いたいのも分からなくもない。サーシャリオンは厄介事と聞いても面白そうな顔をするだけで、困ったりしないから。

「俺も賛成。そんなこと言ったら、本当にそうなりそうだもんな。――さて、と。じゃあサーシャ、グレイが帰ってきたら風呂に行くか」

風呂場は三人入れるくらいの狭い個室型だ。冒険者によっては湯が黒くなるので、ひどい時は湯を入れ替えるらしい。ただ、啓介は

水さえ入っていれば、〈白〉の魔法を使って電磁波で湯に変えられるので、燃料代がかからない。しかもサーシャリオンがいれば、魔法で水を張ってくれて大助かりというわけだ。

こんなみみっちい使い方をしたことがないと、サーシャリオンには不平を言われるが、電磁波の考え方は知らなかったようで、〈赤〉でもないのに水を湯に変えられることが面白かったようだ。これは、電子レンジの仕組みを応用したただけだ。

ある意味、知識の大安売りだと思う。

サーシャリオンが男なのか女なのか性別が無いのか分からないが、男でいる時は男扱いすることにした啓介は、最初こそ気にしていたもののサーシャリオンとも風呂に入るようになった。実を言うと、サーシャリオンは風呂を使ったことがなかったらしい。良いにおいがするからおいしそうと言って石鹸を食べそうになったのを見た瞬間、これは放っておけないと、啓介の世話焼きな性格が表に出てしまっただけである。

「俺も行く。お前らと行くと、湯が綺麗だから」

修太もいそいそと風呂の準備を始めた。

「三人で行くか。なんか修学旅行みたいで楽しいな！」

浮かれ気分で言ったら、修太がじと目で返す。

「修学旅行みたいだから肝試しに行こうなんて意見は却下だぞ」

何で分かったんだ、集団墓地に人魂と火の玉を探しに行こうって言おうとしたのを。

啓介は心から驚いて、白銀色の目を丸くした。

異世界にも火の玉が出るのかを検証してみたかった啓介は、幼馴染の先手スキルにおののきつつ、しかしどうやって巻き込もうかと思案する。一人で見ても面白くないし、人が多い方が楽しいと思うのだ。

本気で悩みだす啓介を、修太が頬を引きつらせて見ていたなど、『お化けツアー、イン異世界』の企画で頭をいっぱいにしていた啓介は気付かなかった。

5 厄介事の予感（後書き）

どうでもいい後書き

ちらりと小耳に挟んだ話では、火の玉は土葬の墓なら出るらしいです。死体から出るリンとなんとかに、火がついたものだとか。

最初は赤外線で湯を温めると書こうと思ったんですが、実際に水が温まるのか分からなかったので、電磁波にしておきました。電子レンジは、電磁波で水分子を振動させてあっためるのですね。

詳しく知りたい方はご自分で調べて下さいませね。

しかし光の魔法を想像だけで使いこなすと便利ですよ。遠赤外線でマッサージも楽々！　って感じで。……しよぼいですが、そうですね。

でも紫外線とかで敵を攻撃とかも出来そう。X線とか……。いや、なんか怖いしファンタジーって感じじゃないからやめとこ。

あと、石鹸が良いにおいしそうとは、小さい頃に思ったんだ。特にしゃぼん玉作る洗剤。美味しそうでなめてみて、にがさに悶絶してたわー。懐かしい。

予約投稿で、少しずつ更新してます。そのうち止まるかも……。個人的には一ページの量が少ない気がするけど。ワードで4Pはあるから、まあまあかな。断片の使徒は1Pはワード4Pからでも更新してるんで。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1032y/>

断片の使徒 -2-

2011年11月14日03時14分発行